令和４年度 新宿区

夏目漱石コンクール作品集

読書感想文コンクール（中学生の部・高校生の部）

「わたしの漱石、わたしの一行」

絵画コンクール（小学生低学年の部・小学生高学年の部）

「どんな夢を見た？あなたの「夢十夜」」

令和５年３月

新宿区
SHINJUKU CITY

あいさつ

新宿区長　吉住　健一

令和４年度新宿区夏目漱石コンクールに応募していただいた全国の小学生・中学生・高校生の皆さん、ありがとうございました。また、入賞された皆さん、本当におめでとうございます。

次世代を担う子どもたちが夏目漱石を知り、その作品に触れる機会を創出するとともに、「新宿区立漱石山房記念館」の整備事業を盛り上げていくために開始した本コンクールも、今回で８回目を迎えました。

読書感想文コンクール「わたしの漱石、わたしの一行」には全国の中学生・高校生あわせて962点の応募がありました。また、絵画コンクール「どんな夢を見た？あなたの「夢十夜」」には、全国の小学生から586点の応募がありました。今回も一人ひとりの着眼点が光る力作揃いでした。漱石山房記念館の開館から５周年を迎えた今年度も、ひきつづき全国の皆さんから数多くの素晴らしい作品をご応募いただけたことに、感謝申し上げます。

漱石山房記念館には、美しい装幀の初版本や漱石直筆の原稿、漱石山房の再現が見られる展示室、漱石作品や関連図書を手に取ることができる図書室やブックカフェがあります。ぜひ漱石山房記念館にご来館いただき、漱石が名作の数々を執筆した地で、その文学世界に触れてみてください。皆さんの豊かな感性、表現力を磨いていく一助になれば嬉しく思います。

末筆になりますが、本コンクール実施にあたり、後援していただいた漱石ゆかりの地方自治体、企業、大学、愛好団体等の皆様を始め、審査にご参加いただいた皆様、保護者の皆様、ご指導くださった先生方、その他ご協力いただきました多くの皆様に心より御礼申し上げます。

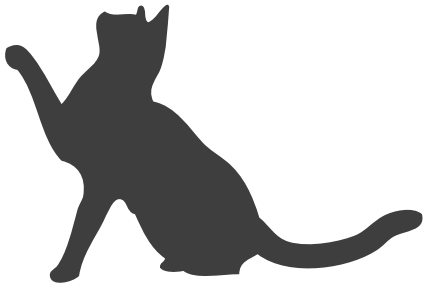
―もくじ―

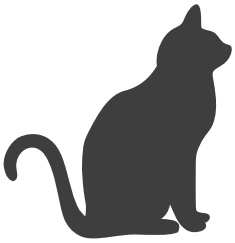
■新宿区長あいさつ……1
■新宿区立漱石山房記念館……4
■コンクール概要……5
■審査委員紹介……6
■応募状況……6
■審査講評……8

読書感想文コンクール「わたしの漱石、わたしの一行」……16

〈中学生の部〉
・最優秀賞
暁星中学校　2年　澤田　憲……17
・朝日新聞社賞
日本女子大学附属中学校　1年　中澤　優莉栄……19
・紀伊國屋書店賞
日本女子大学附属中学校　1年　伊藤　優希……20
・新潮社賞
日本女子大学附属中学校　1年　山本　真愛……22
・東京理科大学賞
恵泉女学園中学校　3年　相川　遥……23
・二松学舎大学賞
日本女子大学附属中学校　1年　南　葵彩……25
・くまもと賞
新宿区立新宿中学校　3年　木村　日咲……26
・佳作
暁星中学校　1年　坂崎　優斗……28
神戸大学附属中等教育学校　1年　神原　悠一郎……29
済美平成中等教育学校　2年　阪上　周翼……31
筑波大学附属中学校　1年　志村　由梨……32
筑波大学附属中学校　2年　渡井　結月……34
長野清泉女学院中学校　3年　小根澤　悠希……35
日本女子大学附属中学校　1年　澁谷　実生……37
日本女子大学附属中学校　1年　馬場　百花……38

〈高校生の部〉
・最優秀賞
光塩女子学院高等科　2年　大隅　咲喜……40
・朝日新聞社賞
東京都立桜修館中等教育学校　2年　磯田　颯人……41
・紀伊國屋書店賞
光塩女子学院高等科　2年　岸本　幸千……43
・新潮社賞
東京都立桜修館中等教育学校　2年　岩井　紫音……44
・東京理科大学賞
光塩女子学院高等科　2年　味原　咲希……46
・二松学舎大学賞
東京都立桜修館中等教育学校　2年　熊野　風香……47
・くまもと賞
東京都立桜修館中等教育学校　2年　塩澤　なずな……49
・佳作
光塩女子学院高等科　2年　川口　真悠子……50
光塩女子学院高等科　2年　小林　花帆……52
光塩女子学院高等科　2年　佐久間　ゆうか……53
東京都立桜修館中等教育学校　2年　林　美帆……55
東京都立桜修館中等教育学校　2年　宮坂　和来……56
広島県立海田高等学校　2年　石原　光莉……58





絵画コンクール
「どんな夢を見た？あなたの「夢十夜」」

〈小学生低学年の部〉
・最優秀賞
新宿区立戸塚第二小学校 3年 坂本 妃花里……64
・朝日新聞社賞
熊本県立かもと稲田支援学校 1年 野中 結翔……65
・紀伊國屋書店賞
新宿区立四谷小学校 1年 石津 颯才……66
・新潮社賞
玉名市立横島小学校 3年 野村 蓮介……67
・東京理科大学賞
新宿区立余丁町小学校 1年 佐倉 こえり……68
・二松学舎大学賞
新宿区立落合第一小学校 1年 利重 育……69
・くまもと賞
新宿区立淀橋第四小学校 2年 石内 璃王……70
・佳作
江戸川区立船堀小学校 3年 月舘 志乃……71
北九州市立則松小学校 3年 仲川 真人……71
新宿区立落合第一小学校 3年 佐々木 奏……72
新宿区立柏木小学校 3年 深澤 穂……72
新宿区立津久戸小学校 1年 腰越 雪乃……73
新宿区立余丁町小学校 2年 大塚 遥乃……73
新宿区立早稲田小学校 3年 森 ふよう……74
日本女子大学附属豊明小学校 1年 市原 由衣……74
文京区立誠之小学校 2年 東 櫻子……75
目黒星美学園小学校 2年 中井 優里……75
目黒星美学園小学校 2年 安永 都和乃……76

〈小学生高学年の部〉
・最優秀賞
玉名市立八嘉小学校 5年 西 愛梨……78
・朝日新聞社賞
新宿区立四谷第六小学校 5年 伊地知 小実……79
・紀伊國屋書店賞
新宿区立落合第三小学校 5年 三堀 真歩……80
・新潮社賞
新宿区立落合第六小学校 6年 木村 真白……81
・東京理科大学賞
安芸太田町立筒賀小学校 6年 馬場 俊輔……82
・二松学舎大学賞
宮崎市立赤江小学校 4年 眞田 琉衣……83
・くまもと賞
新宿区立戸塚第二小学校 6年 大野 葵衣……84
・佳作
安芸太田町立筒賀小学校 5年 井野上 蒼樹……85
熊本市立古町小学校 5年 村元 明莉……85
新宿区立大久保小学校 5年 ユキ ココ……86
新宿区立柏木小学校 6年 萩口 泉太……86
新宿区立柏木小学校 6年 橋本 璃果……87
新宿区立戸塚第三小学校 5年 岩﨑 統杏……87
新宿区立富久小学校 6年 穴沢 千寛……88
新宿区立戸山小学校 5年 猪俣 乃々華……88
新宿区立西新宿小学校 6年 宮地 咲希……89
新宿区立西戸山小学校 6年 増渕 歩実……89
新宿区立東戸山小学校 4年 合田 真一朗……90
新宿区立東戸山小学校 4年 所 雷太……90
文京区立誠之小学校 5年 王 海萌……91

新宿区立漱石山房記念館

文豪・夏目漱石は、新宿で生まれ育ち、亡くなるまでの９年間を「漱石山房」と呼ばれた早稲田南町の家で暮らしました。『三四郎』『こころ』『道草』など数々の代表作が執筆され、「木曜会」と呼ばれる文学サロンが漱石山房で開かれました。

平成29年９月24日、新宿区はこの跡地に、漱石にとって初の本格的記念館「新宿区立漱石山房記念館」を開館しました。

この記念館では、資料の収集・保管を行うとともに、展示会や講座・講演会等を開催し、漱石やその文学世界について発信しています。また、図書室やブックカフェでは、漱石の作品や関連図書に触れることができます。

漱石を、文学を愛する皆様が集い、学び、大切な「土地の記憶」を未来に継承していきます。

施設の概要

●開館時間　午前10時～午後６時（入館は午後５時30分まで）
●休 館 日　月曜日（休日の時は次の休日でない日）
　　年末年始（12月29日～１月３日）
　　展示替期間等
●観 覧 料　一般300円、小中学生100円
（通常展）　※団体（20人以上）は個人の観覧料の半額
●所 在 地　新宿区早稲田南町７番地
●問合せ先　☎ 03-3205-0209　FAX 03-3205-0211
●アクセス　東京メトロ東西線早稲田駅より徒歩10分、神楽坂駅より徒歩15分
　　都営大江戸線牛込柳町駅より徒歩15分
　　都営バス（白61）牛込保健センター前より徒歩２分

コンクール概要

①読書感想文コンクール

「わたしの漱石、わたしの一行」【中学生の部・高校生の部】

夏目漱石の作品（作品の指定なし）を読み、自分の心に深く残った「一行」を選び、なぜその一行を選んだのかを1，000～1，200文字（400字詰め原稿用紙2枚半～3枚程度）で表現していただきました。

「一行」は文章のひとくだりとし、一文に限りません。また必ずしも一行に収まらなくても良いこととします。また、本文の一人称はコンクール名称の「わたし」に限定しません。日本語で書かれ、未発表で筆者自身のオリジナル作品に限ります。

②絵画コンクール

「どんな夢を見た?あなたの「夢十夜」」

【小学生低学年の部（1・2・3年生）・高学年の部（4・5・6年生）】

将来の夢ではなく、自分が「こんな夢をみた」又は「こんな夢をみたい」などをテーマに、想いをめぐらせ自由な発想で描いていただきました。夏目漱石作品を読んでいなくても良いこととしました。

八つ切りサイズ（27cm×38cm・縦横自由）の画用紙に画材は、鉛筆、色鉛筆、クレヨン、絵の具、マジック、サインペンなど自由。立体的でない貼り絵、切り絵、版画も可。デジタル作品は対象外。

作品募集チラシ（絵画）

作品募集チラシ（読書感想文）

審査委員紹介（順不同・敬称略）

	読書感想文コンクール	絵画コンクール
審査委員長	北村　薫（作家）	
審査委員	小尾　眞 （日本国語教育学会 常任理事）	南口　清二 （一般社団法人 二紀会理事）
	佐藤　裕子 （フェリス女学院大学 文学部日本語日本文学科教授）	藪野　健 （府中市美術館館長 日本藝術院会員）
	松下　浩幸 （明治大学農学部教授 （近代文学））	
	吉住　健一（新宿区長）	
	針谷　弘志（新宿区教育長）	

後援企業・大学賞選考	㈱朝日新聞社文化部長代理　丸山　玄則
	㈱紀伊國屋書店常務取締役　西根　徹
	㈱新潮社総務部・広報担当　馬宮　守人
	東京理科大学近代科学資料館館長・名誉教授　伊藤　稔
	二松学舎大学文学部国文学科准教授　中谷　いずみ

※肩書は審査時のものとなります。

また、熊本県よりご後援及び自治体賞賞品を提供していただいております。

読書感想文コンクール一次審査にご協力いただきました。

愛甲　修子　　宇佐見　尚子　　岡田　幸一　　金指　紀彦
鈴木　秀一　　福本　元恵　　森　顕子　　山下　憲人

（五十音順・敬称略）

応募状況

●読書感想文コンクール

中学生の部４６５点、高校生の部４９７点、計９６２点

●絵画コンクール

小学生低学年（１～３年生）の部３９８点、
高学年（４～６年生）の部１８８点、計５８６点

令和４年度新宿区夏目漱石コンクール
作品応募にご協力いただいた学校等

絵画

小学校等

安芸太田町立筒賀小学校
安芸太田町立戸河内小学校
江戸川区立春江小学校
江戸川区立船堀小学校
大阪市立開平小学校
大阪市立阪南小学校
お茶の水女子大学附属小学校
葛飾区立上小松小学校
北九州市立則松小学校
岐阜市立市橋小学校
熊本県立かもと稲田支援学校
熊本市立古町小学校
品川区立第四日野小学校
新宿区立愛日小学校
新宿区立市谷小学校
新宿区立牛込仲之小学校
新宿区立江戸川小学校
新宿区立大久保小学校
新宿区立落合第一小学校
新宿区立落合第二小学校
新宿区立落合第三小学校
新宿区立落合第四小学校
新宿区立落合第五小学校
新宿区立落合第六小学校
新宿区立柏木小学校
新宿区立津久戸小学校
新宿区立鶴巻小学校
新宿区立天神小学校
新宿区立戸塚第一小学校
新宿区立戸塚第二小学校
新宿区立戸塚第三小学校
新宿区立富久小学校
新宿区立戸山小学校
新宿区立西新宿小学校
新宿区立西戸山小学校
新宿区立花園小学校
新宿区立東戸山小学校
新宿区立余丁町小学校
新宿区立四谷小学校
新宿区立四谷第六小学校
新宿区立淀橋第四小学校
新宿区立早稲田小学校
杉並区立桃井第二小学校
成蹊小学校
玉名市立大野小学校
玉名市立玉陵小学校
玉名市立高道小学校
玉名市立玉名町小学校
玉名市立築山小学校
玉名市立滑石小学校
玉名市立八嘉小学校
玉名市立睦合小学校
玉名市立横島小学校
中央区立久松小学校
中央区立明正小学校
千代田区立和泉小学校
千代田区立九段小学校
千代田区立麹町小学校
千代田区立富士見小学校
筑波大学附属小学校
東京学芸大学附属大泉小学校
東京学芸大学附属竹早小学校
東京三育小学校
豊島区立椎名町小学校
中野区立桃園第二小学校
名古屋市立名東小学校
習志野市立袖ケ浦東小学校
日本女子大学附属豊明小学校
文京区立大塚小学校
文京区立駕籠町小学校
文京区立金富小学校
文京区立窪町小学校
文京区立駒本小学校
文京区立昭和小学校
文京区立誠之小学校
文京区立関口台町小学校
文京区立千駄木小学校
文京区立林町小学校
文京区立本郷小学校
文京区立明化小学校
文京区立柳町小学校
文京区立湯島小学校
町田市立本町田東小学校
松山市立新玉小学校
松山市立桑原小学校
松山市立河野小学校
松山市立生石小学校
松山市立垣生小学校
松山市立双葉小学校
松山市立和気小学校
三鷹市立第二小学校
宮崎市立赤江小学校
目黒星美学園小学校
山鹿市立山鹿小学校
横浜市立市場小学校
チャイルド・アート教室くじら

読書感想文

中学校

暁星中学校
恵泉女学園中学校
神戸大学附属中等教育学校
済美平成中等教育学校
札幌市立前田中学校
新宿区立牛込第三中学校
新宿区立新宿中学校
新宿区立新宿西戸山中学校
清泉女学院中学校
高松市立桜町中学校
千代田区立九段中等教育学校
筑波大学附属中学校
東京都立大泉高等学校附属中学校
長野清泉女学院中学校
日本女子大学附属中学校
松山市立南第二中学校
横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校
横浜雙葉中学校

高等学校

愛媛県立松山西中等教育学校
開智高等学校
神田女学園高等学校
暁星高等学校
熊本県立天草高等学校
光塩女子学院高等科
聖ヨゼフ学園高等学校
多摩大学附属聖ヶ丘高等学校
田園調布学園高等部
東京学芸大学附属高等学校
東京都立桜修館中等教育学校
東京都立杉並高等学校
東京都立富士高等学校
同志社国際高等学校
二松学舎大学附属高等学校
長野清泉女学院高等学校
広島県立海田高等学校
広島県立福山誠之館高等学校
福岡県立北筑高等学校
松山聖陵高等学校
山形県立山形東高等学校
横浜雙葉高等学校

審査講評

審査委員長

作家　北村　薫

昨年の初夏、塚谷裕一さんの『漱石の白百合、三島の松　近代文学植物誌』（中公文庫）という本が出ました。中に収められた「漱石の白くない白百合」は、発表当時から評判になった論考です。夏目漱石は『それから』の中に、《三千代は（中略）手に大きな白い百合の花を三本ばかり提げていた》と書いています。現代人は白百合といえば、テッポウユリを思い浮かべる。しかし、漱石の頭にあったのはそれなのか。――わずかな一行、一語であっても、読む人により、さまざまなことを思い、考えるものです。

今回は、皆さんのそういった感受性と、さらに夢というテーマにおける創像力の豊かさに接することができました。考えること、空想することの大切さと喜びを、あらためて教えられた思いです。

読書感想文審査委員
日本国語教育学会常任理事

小尾　眞

コンクールが再開されて二年目になりましたが、漱石作品を深く読み、主人公の気持ちを捉える想像力が豊かな作品が、例年より多いと感じました。

さらに、まとめ方に自己の体験を照らし合わせ説得力に磨きをかけていると感心する作品も目立ちました。

作品に関しては、中学生・高校生とも、教科書の配当に関係なく、幅広く選んでいることが印象的でした。

恐らく、一見難しいと思われる作品でも、くり返し読むことで身近に引き寄せ、自己の体験の中に上手に位置付けたのだと思います。

皆さんのこれからの、益々の読書生活に期待しています。

読書感想文審査委員
フェリス女学院大学教授

佐藤　裕子

今回のコンクールでは、『吾輩は猫である』、『一夜』、『坊っちゃん』、『三四郎』、『夢十夜』、『こころ』、『永日小品』等、多岐に亘る作品の中から、「わたしの一行」が選ばれていました。

漱石作品から「一行」を選び、その根拠・論拠を提示するというこのコンクールは、単なる読書感想文とは異なって、作品を深く読み解き、選んだ一行のどこに感動したか、自分の思考を論理的・分析的に言語化することにあります。これは、学びの場面においても、また社会人になっても、とても重要なことです。他者に対して、自分の考えていることを、的確な言葉を選んで、論理的に語る・表現

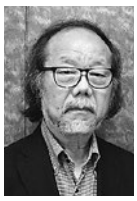
するということは、まさに人間が生きることそのものに関わってくるのです。沢山本を読んで、沢山考えてほしいと思います。

読書感想文審査委員
明治大学教授
松下　浩幸

今回、初めて審査を担当させていただきましたが、応募作品のレベルの高さに驚きました。高校生のものはもちろん、中学生のものでも見事な文章で綴られているものが多く、大変頼もしく思いました。

漱石の文学世界は十代の人には決して分かりやすいものではないと思いますが、自分の想像力と思考力の限りを尽くして漱石の作品世界に挑もうとする真摯な姿勢には感激しました。

漱石の作品中の一行の文から物事の本質に迫ろうとする鋭い考察力、また自分自身の体験の意味を文学作品に重ねながら考えようとするねばり強い思索力は、今後の人生を生きるうえでも、きっと重要な示唆を与えてくれるものになると思います。これからも文学作品と接することで可能となる〈気づき〉を、どうか大切にしてください。



絵画審査委員
一般社団法人二紀会理事
南口　清二

君のあの大胆でおおらかな筆づかい、どこから来たのだろうか。何度も塗り重ねた深く、重厚な色彩、きっと楽しかったのか。いや思い切りチャレンジしたのだろうか。素早いタッチから、スピード感のある音が聞こえてくる。やわらかな新鮮な透明感のある雰囲気。細かく慎重に、息遣いのように描きこんだ描写。すごいのだ。今年も多くの作品に感謝したい。君たちに感謝したい。大人の社会は明るさに満ちているとは言えない。暗い影が大きく感じることもある。どんな夢であっても、君たちの心の奥底から感じたものの表れなのだ。君たちのまなざしが、大人の希望につながってゆくようだ。

これからもいろんな機会に『絵』を描いていってください。描くことが喜びであり続けてください。人間の歴史が大切に残してきた『本物』との出会いがきっと来るのです。

絵画審査委員
府中市美術館館長・日本藝術院会員
藪野　健

夏目漱石の「夢十夜」がきっかけとなって、夢について考えたり、描いたりするのは素敵だ。眠る時の夢は儚く、気がつくと霧散して

しまう場合が多い。空想はその記憶の断片を集めることから始まる。発見や洞察に結びつく。

作品に出会うのが楽しい。

「アザラシとあそぶゆめ」のリアリティ、「おばけレース」の発想の意外さ、「きょうりゅうになったよ」は恐竜を見てみたい気持ちが、自分が恐竜になってしまうのは素晴らしい展開だ。

「ドクターイエロー」は自分の好きな鉄道車両をズバリと絵で語ってくれている。「人のからだの夢」こんな楽しい解剖図は初めてだ。「どんなゆめみた?」は台風の恐怖の悪夢だ。

「わたしのゆめ」の造形の語彙の豊かさに驚く。「夢の中の絶景」は「蜘蛛の糸」の様に少年はぶら下がりながら世界を見つめている。「久しぶり」記憶のなかの犬だ。「浸水都市」太った地球温暖化の果ての都市を想う。「ドアにつながる宇宙の世界」には日常と非日常が生活空間の中で結びつく着想に惹かれる。「アリ」巨大に拡大できるのも夢だ。「妖怪戦争」こわいけれど、こんな夢でうなされるのは戦いに思える。「夕暮れの海」は簡単に表現しているようで、深く詩的だ。心に残り余韻が広がる。

作品を通して、忘れていた夢や空間恐怖、不条理、憧れが甦った気がした。

審査委員

新宿区長　吉住　健一

今回の読書感想文部門・中学生の部で最優秀賞となった作品は、難しい漱石の初期作品を読み解いたうえで、漱石ファン好みのまち歩きスポットを記した読み手の好奇心をくすぐる感想文でした。漱石山房記念館では、漱石関連のまち歩き事業も行っています。この立場から、作品とまちを結び付けてくれた視点を嬉しく感じました。

絵画部門は、今回は例年に比べると自分の願望を描いた作品が多く寄せられたと思います。恐らくコロナ禍にあって、学校で友だちとおしゃべりする機会が制限されてしばらく経ったことなども影響しているのかなと考えながら拝見しました。率直な表現の絵が多く、印象に強く残る作品がたくさんあったと感じました。

審査委員

新宿区教育委員会教育長

針谷　弘志

本年度も全国各地から、たくさんの皆さんにご応募いただき、ありがとうございました。

読書感想文部門では、これまで体験したことなどを踏まえ、「わたしの一行」に真摯に向き合い、「わたしの一行」をとおして、自

身を見つめ、問いかけ、考えている姿が想像できました。そうして紡がれた言葉が、気持ちを乗せて、思いを伝えてきており、力作ぞろいでした。

絵画部門では、「あなたの『夢十夜』」をテーマに、現実の枠を飛び出す豊かな発想と表現力に、とても楽しい気持ちになりました。「どんな夢を見た?」、未来に向かって、これからも大きな夢を見続けてほしいと思いました。

朝日新聞社賞選考
㈱朝日新聞社 文化部長代理
丸山 玄則

前回に続き2度目の審査員を務めさせていただき光栄です。今回も瑞々しい感性に感銘を受けました。

3年続くコロナ禍は、小中高校生の皆さんの大切な学校生活に様々な負の影響を与えたのではないかと思います。100年前の時代を生きた漱石もまた、近代の出現に懊悩(おうのう)しながら、多くの普遍的作品を残しました。

中学生、高校生の皆さんの作文からは、漱石の苦悩を見事にすくい取り、自分の言葉で堂々と書ききった作品が数多くありました。どうして理解できるのか、不思議に思うほどでした。

一方、絵画部門の「夢」は、自由で型にはまらない、鮮烈な表現の連続でした。作品のすべて、一つひとつが強烈な個性をはなっていて、子どもたちの想像力の豊かさに目をみはりました。

紀伊國屋書店賞選考
㈱紀伊國屋書店 常務取締役
西根 徹

豊富な読書体験と早熟な才能を実感させられる完成度の高い作品から、選んだ一行を軸に丁寧に感想を叙述し自身の課題を乗り越える糧にしようとする作品まで、多様な感想文に今回も出会うことができました。漱石作品に真摯に向き合う皆さんの姿勢に感銘を受け、私自身もう一度漱石をきちんと読まなければと痛感しました。

絵画部門では、大胆な配色と構図でのびのびと夢を形にした個性的な作品が今回もたくさんあり、ワクワクしながら審査させていただきました。皆さんが今の感性と表現をこれからも素直に伸ばしていってくださることを期待します。

新潮社賞選考
㈱新潮社 総務部・広報担当
馬宮 守人

読書感想文の中学生部門では、文庫本の解説と見紛う完成度の文章もあり驚きましたが、馴染み深い漱石作品を自分なりの視線で考察し直す試みが目立ちました。高校生部門でも、令和の高校生の実体

験を出発点に、漱石の苦悩や警鐘に迫った秀作が見受けられました。

小学生が対象の絵画コンクールには、例年以上に多彩な「夢」が集まりました。恐竜に乗るだけでは満足できず自らが恐竜になってしまった作品などには、描き手の強い恐竜愛・妖怪愛を感じ、思わず頬が緩みます。特に高学年作品では、アニメやイラストなど「大人」の強い影響を受けながらも、それをしっかり自分のものにした絵が多く、今を生きる子どもたちの逞しさを感じました。

東京理科大学賞選考
東京理科大学 近代科学資料館館長・名誉教授
伊藤 稔

中学生部門では、夏目漱石の『三四郎』作品の中のことば「囚われちゃ駄目だ」に、注目できる感性をすでに持っていることに、驚かされました。中学生が、自分の創造力と感性の中に「人間の自由性」を見出し、それに気づき、今ある自分の姿を俯瞰（ふかん）し、これからの自分の生き方まで探究していることは、大変素晴らしいです。人間が、生まれながらにすでに、身に着けている「言葉の力」とその表現力について、自分自身で省察して、さらに自身の生き方や考え方に広げて考察できていることが、受賞理由の1つであることにも、審査委員としても気づかされました。ありがとうございました。

高校生部門では、「硝子戸の中」（7）を数ある漱石の作品から選び、その人間心理の核心まで読み解く力に、大変驚き、その感性に共感いたしました。まだ、現代社会のカウンセリングという言葉が生まれる以前に、夏目漱石はカウンセリングを実践していたという事実を伝える文章であることを、見事に読み解いた現在の高校生の洞察の深さに感動しました。イギリス留学中の漱石の書物の中に、ウイリアム・ジェームス等の書籍も含まれていることを思うと、漱石自身が、当時の心理学の先にあるカウンセリング哲学をすでに、具現化していたということを現代の高校生が理解していることは、素晴らしいと思います。

二松学舎大学賞選考
二松学舎大学准教授
中谷 いずみ

漱石作品の中から一行を選ぶのは、とても難しいことだと思います。今回寄せられた読書感想文を読み、その一行を取り上げた理由に納得したり、視点のユニークさに驚いたり、見過ごしていた表現にはっとさせられたりしながら、あらためて文学を読むことの豊饒（ほうじょう）さに向き合うこととなりました。現代の若い読者の感性で綴られた思考や想いにはそれぞれの個性が映しだされているようでもあり、漱石作品との多様な出会いがそこにあることを実感しました。また絵画では、夢をめぐるイメージ世界が紙の上で繰り広げられており、その豊かな想像力に感心しました。

読書感想文コンクール一次審査講評

愛甲　修子

授業で作品に出会うのは、お見合いのようなものかもしれません。仲人である先生が、「二人を出会わせたい」と思って、ひき合わせます。しかし、そこからは、二人の世界です。形はどうあれ、二人は出会ったのですから、自分の目で相手を見て、自分の心で感じてほしい。

お見合いから恋愛にかわった人たちもたくさんいました。自分と等身大の登場人物をとらえ、自分の言葉で書かれた文章は、私の心に響きました。

是非ここからは、自分で出会いをさがしていってください。

宇佐見　尚子

漱石の作品から、自分自身を振り返り、見つめ直すような文章が多く見られた。作品との出会いが、新たな自分に気づくきっかけとなったり、様々な発想をもたらしていたりすることに触れ、改めて言葉の力を実感できた。

岡田　幸一

今年度の審査では、特に中学一年生の作に、独自の視点から深い考察を試みている力作が多く見られました。驚きながらその読み応えを楽しく味わいながらの審査となりました。

漱石作品が現代の若者たちの心を今も揺さぶりつづけていることを改めて思い、作品の持つ普遍的な力というものを再確認したような思いがあります。

金指　紀彦

中学生には、「意見・理由・具体例・結論」という型を用いて文章を書く、一つの言葉を取り上げてそこから考えを広げていく、ということが特徴として挙げられました。その一方で高校生の中には、段落を分けずに最初から最後まで一気に書いている人がいました。「読むこと」の学習は、「書くこと」を意識しながら行うことが大事であると改めて思いました。

鈴木　秀一

中学生の皆さんが選んだ作品は『坊っちゃん』と『こころ』が多かったようですが、作品のことから離れて自分の経験に終始してしまうことなく、作品の内容をしっかり踏まえた上で論じているものが多かったように見受けられます。

一方高校生の皆さんが選んだ作品は『こころ』が圧倒的に多い中、『夢十夜』や『三四郎』、『硝子戸の中』、『草枕』の他、「自選講演集」を扱ったものも見られ、読書の幅の広がりが感じられました。また、高校生らしく、これからの進路や生き方を模索していくような作品が多く見受けられました。

このコンクールでは必ず作品の一部分を取り上げて論じることに

なっていますが、作品全体の主題を追究し、導き出した自分の考えを自らの言葉で語っている優れた作品もありました。作文をしていく中で、書く力はもとより、心の中に多くの「気づき」が生まれたのではないかと思います。応募した多くの皆さんの、これからのご活躍を切に願っております。

福本　元恵

今年度も、名作の世界に触れて言葉や表現と真摯に向き合い、作品の読みを深めながら、時代や社会の捉え方や人間理解、自己理解を深めていった成果がよくまとめられた秀作に、数多く出合いました。

特に、描かれた作品の世界や人物の生き方に、現在の自分の日常生活や、自分の在り方、将来に向けての課題を重ねて、人生の指針や自分の望む生き方を見出した作品が多く、文章に表現された考えの豊かさに心惹かれ、皆さんのお力を大変心強く感じました。

心に残る一行を選んで感想を書き綴ると、その一行で表現された内容の理解そのものに心が奪われて、作品を俯瞰（ふかん）した上でのその一行の役割の読み解きや、作品の読み深め、作者との対話が、心ならずも疎かになりがちです。選んだ一行から作品の世界を思い描き、心情や場面、作品の主題を解釈し鑑賞した文章に、読書感想文としての価値が存在し、意見文や解説文とは異なる奥深さや魅力が生まれます。

また、推敲を重ねる中で、誤字や脱字、表現の妥当性に気付き、段落構成や展開を再考する機会にも恵まれます。読み手の理解や共感が得られてこそ、表現や作品が成り立つことを忘れずに、様々な工夫を試みながら文章を完成に近づける楽しさを味わっていきましょう。

森　顕子

今年度は、夏目漱石の作品と初めて出会って書かれた方が多かったように思います。「初めて」というのは、作品としっかり向き合った、という意味です。そして多くの人が、この出会いをきっかけとして、再読したり、別の作品や、同じような主題の別の作家の作品を読んでみたい、とあったことはとてもうれしく思いました。読書の広がりは自分の世界の広がりです。これからもよい作品と出会われてください。

山下　憲人

中学生・高校生部門の審査を通じての講評を記します。

これまで同様に、等身大の自分を作品世界や登場人物に重ねながら、思索を深めていくという筆致が多く見られました。読後感という範疇に留まらず、自らの価値観や生き方を模索したり、さらには哲学的な思索へと昇華されている作品も少なからず見受けられました。漱石が提示しようとした世界観を、若い皆さんが純粋に素直に受けとめ、新しい認識や価値観を紡いでいく姿に心強いものを感じます。

中高生の皆さんが、その年代に出会っておくべき漱石作品があると感じます。漱石が私たちに問いかけてくるものを確かに受容しつつ、その確かさから生まれてくる認識や価値観こそが、皆さんのこれからを形作っていくと考えます。漱石作品から生まれる思索を記す、あるいはその軌跡を読み直してみることで、皆さんの「輪郭」が紡がれることを心から期待しています。

読書感想文コンクール「わたしの漱石、わたしの一行」

〈中学生の部〉
・最優秀賞……17
・朝日新聞社賞……19
・紀伊國屋書店賞……20
・新潮社賞……22
・東京理科大学賞……23
・二松学舎大学賞……25
・くまもと賞……26
・佳作……28

〈高校生の部〉
・最優秀賞……40
・朝日新聞社賞……41
・紀伊國屋書店賞……43
・新潮社賞……44
・東京理科大学賞……46
・二松学舎大学賞……47
・くまもと賞……49
・佳作……50

中学生の部

最優秀賞

僕の聖地、牛込界隈

暁星中学校　2年
澤田（さわだ）　憲（けん）

作品名『一夜』
選んだ一行
人生を書いたので小説をかいたのではないから仕方がない。

漱石の作品を読むと、牛込界隈の風景が不意に現れ、妙な気分になる。『吾輩は猫である』に出てくる「首懸けの松」は外濠の土手の上で、『行人』の「雅楽稽古所」は飯田橋駅の側で、どちらも僕の通学路に近い。『明暗』の「キッドの靴」や「仏蘭西（フランス）語の読本」は、僕が卒業した小学校を彷彿とさせる。神田川沿いを歩く時、『それから』の三千代にふと出会うようで緊張する。もとより虚構だが、舞台が実在するとリアリティが増す。アニメ等の聖地巡礼が流行るのもうなずける。

『一夜』の舞台は八畳の座敷で、南西に「鉄牛寺」がある。牛込界隈にこの名の寺はない。だが僕は寺内（じない）と呼ばれた神楽坂五丁目辺りかと思う。本文中に「東隣で琴と尺八を合わせる音」とあり、花街特有の路地を連想するからだ。『一夜』は「朦朧として取り留めがつかない」と、作中作として卑下する場面が『猫』にある。でもこうして場所を絞ると、ピントが合いより鮮明になる。男女三人の掛け合いが細かな仕草とともに映し出され、ドキュメンタリー映画を見ている感覚になる。

最終段落は、まさに映画のエンドロールで、四つの問答が示される。その三番目で「三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？」と唐突に切り出し、それに応えて「人生を書いたので小説をかいたのでないから仕方がない」と気を吐く。不遜だが率直な物言いにも聞こえる。『倫敦（ロンドン）塔』では後書きを添え、『幻影の盾』では前書きを載せ、本文の枠外で執筆動機などを補足した。作家デビュー間もない不安がそうさせたのか。だが本作では本文末尾に配置した。この変化が興味深い。

そもそも「人生を書いた」とはどういうことか。高浜虚子は『漱石と私』の中で、連句などが創作熱を煽る口火になったと回顧している。僕ははっとした。三人の掛け合いを読み直す。ああ、これは句を付けているのだ。三人は連衆（れんじゅう）で、「美

しき多くの夢を」と吟ずるが、雨などの事物に刺激され詩興を動かし、付け筋を楽しむ。漱石は執筆役で、客観的に記録するが、三人が寝入ると視点は全知的になり、「凡てを忘れ」「太平に入る」と呟き、人生観を語って、例の四つの問答で締める。

英国帰りの文学者だが、相変らず英語教師のままでくすぶる中、仲間の励ましで連句を巻く。すると言葉が溢れ出る。『一夜』には、表現や生き方に懊悩し、身をよじって寝転ぶ漱石がいる。人生を「一貫した事件」として扱う小説に憤り、連句や自分語りで表現を試みる。同時に「己れを斯く」ことなく生きようと自戒する。『一夜』から一年後、『猫』の最後も「太平に入る」と結び、『草枕』でも「凡てを忘却してぐっすり寝込むような」詩味を礼讃する。二年後、ついに職業作家となる。思えば連句は巻戻しを禁じ、後戻りできない人生に喩えられる。博士や教授の名利を断つが、逸民となるまでは突き抜けない。

やはり『一夜』の舞台は起伏の多い神楽坂が相応しい。また一つ、僕の聖地ができた。

審査講評

作品に描かれた場所・空間を身近に引き寄せ、実在する作品の舞台という意味以上の重みを持つことを流行している「聖地巡礼」と重ねて語っている。

朝日新聞社賞

先生とこころ

日本女子大学附属中学校　1年
中澤（なかざわ）　優莉栄（ゆりえ）

作品名『こころ』
選んだ一行
私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新らしい命が宿ることが出来るなら満足です。

初めてこの文を読んだとき、私はとても情熱的な言葉だと感じたことを覚えている。「自分の心臓の血を、自ら破ってあなたに浴びせかけようとしている」。私がずっと頭を捻っても到底ててこないような表現を、漱石はいともたやすく、しかし心に深く残るように描き出した。先生はこの手紙を「私」に対して書き綴っているけれども、この一節を読んだとき、読者の心臓にも「先生の最期」ということを深く深く抉ってくるのである。

この文を読み解くと、私の中には一つの疑問が浮かび上がってきた。それは、先生の心臓の血は私の顔に浴びせられるのに、新たな命が宿るのは私の胸、ということである。これには漱石が本を書く上で、なぜ題を『こころ』としたのか、その本質に迫っていく問いなのではないかと思う。

私は、こころというものは、一人の中に二つ存在すると思っている。それは脳と心臓である。これらのこころは、それぞれに課された役割が違う。まず、脳はものを考える役割を持つ。私たちにはこころが心臓にあるというイメージがあるが、しかし私たちが心臓で物事を考え、行動しているのかと言われればそれは違う。全身に指示を出し、感情を生み出すのは司令塔たる脳の役割なのだ。対して心臓は、人間が動物として持つ生存本能を第一とする。心臓が全身へ血を巡らせ、どくりどくりと、生きている限り絶え間なくその鼓動を刻み続けること。それは、人間の生きたいと願う意志であり、心臓がこころとしての役割を果たしている証なのである。

さて、ではこの二つの「こころ」は、先生の場合どのように動いていただろうか。

心臓は「死にたくない」と叫んでいた。脳は「私は死ぬべきなのかもしれない」と理性的に考えていた。しかし先生は死ぬのが厭だった。死を見せるのが厭だった。だから今まで咎を背負ったまま生き続けていた。作中では、先生と妻や、先生と私、先生とKなどさまざまな人間のこころが入り混じ

り、そして最期へと繋がったわけだが、皮肉なことに、先生の死を伝えるこの手紙こそ、先生のこころを最も輝かせているものになっている。心臓とは本能だ。本能とは、その人間のこころからの意思であり、遺志である。本能が示すそれを、血という形で生々しく顔に浴びせかけ、「私」の脳まで浸透させる。そして、新しい命というのは本能でしか生まれないわけだから、「私」の胸には己の脳から流れてきた血潮を何遍も何遍も体に巡らせ、「私」と「先生」とが混ざり合った新たな自分というものが生まれるのである。

本能を破り理性を貫いた先生は、心臓を破り遺志を繋いだ。先生の過去を私にも負わせ、そして静かに消えていった。先生の鼓動が真に止まったときというのは、私が手紙を読み終わり、先生の「こころ」を浸透させきったそのとき、その瞬間なのだろう。

審査講評

漱石が『こころ』という題にした理由を鮮烈な一行をきっかけに立証。心臓と脳の二つのこころがあると説明し、「本能を破り理性を貫いた先生は、心臓を破り遺志を繋いだ」と喝破する論理展開に舌を巻いた。

紀伊國屋書店賞

清の愛情

日本女子大学附属中学校　1年
伊藤（いとう）　優希（ゆうき）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと言った。

「おれもあまり嬉しかったから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと言った。」

「坊っちゃん」を読んで私はこの一行がとても深く印象に残った。「坊っちゃん」を読み終えた時、清と坊っちゃんの関係が私にとって一番興味深かった。下女である清だけは、坊っちゃんのことを認めていた。両親や兄から疎まれていた坊っちゃんは清が自分のことを何故賞めるのかよく理解できなかったが清が坊っちゃんのことを疎ましいと思っていないという気持ちは、坊っちゃんに次第に伝わっていった。私自身も家族からほめられたら嬉しいし、家族以外の人から自分

の性格や行動をほめられることも自分が社会で認められているという自信につながる。

四国の中学校に赴任してからも東京の清のことを頻繁に思い出す。坊っちゃんにとって初めての土地で慣れない生活の始まりで唯一、清には、本音を手紙で書く。私は今は家族と暮らしていて辛いことなどがあると家族に相談している。私の話しを聞いてもらうと私の心は少し軽くなり、また元の生活に戻ることができる。坊っちゃんも物理的には清と離れていても清の心とは離れていない。

坊っちゃんが中学校で主に教頭の赤シャツと赤シャツにごまをすっている、のだいこの性格や言動で嫌な思いをしている時、しばし清のことを思い出す。離れて暮らすと清が自分に言ってくれたこと、してくれたことを懐しく、ありがたく思い、とにかく自分のことをほめてくれた清が恋しくなる。私も坊っちゃんと同じ気持ちになることが多い。

坊っちゃんは教師を辞め、清の所に真っ先に戻る。清は今までと変わらず坊っちゃんを大歓迎した。この場面でこの一行が書かれている。この一行は、色々なことがありながらも清が本当に一途に坊っちゃんに愛情深く接してきた証であると思う。そして坊っちゃんが清の愛情に対して真剣に感謝の気持ちを表していると考える。

私は、坊っちゃんが嫌なこと辛いことがあっても自暴自棄にならなかったこと、四国の中学校で教師をしていても坊っちゃんらしく無鉄砲で少々乱暴なそのままの性格でいられたことは何よりも清の愛情と存在があったからだと思う。清が坊っちゃんにとっての心の支えであり、離れていても本音を伝えることができ、坊っちゃん自身でいられることができたのだ。清の存在なしでは坊っちゃんは、めげずに自由に振る舞うことができなかったのではないだろうか。

坊っちゃんと清の関係は本当の家族以上の愛情深い関係であったことに感動した。そして私は、今は家族、周りの大人達や友達を支えに暮らしているが「坊っちゃん」の清のように将来、人の心の支えとなり愛情を深く注ぐことのできる人となりたい。

審査講評

坊っちゃんの清への思いの変化を松山の日常の中で読み解き、坊っちゃんと清の関係に感動しつつ、「人の心の支えとなり愛情を深く注ぐことのできる人となりたい」と結んだ優れた感想文。

新潮社賞

美禰子の心と空の色

日本女子大学附属中学校　1年
山本（やまもと）　真愛（まな）

作品名『三四郎』
選んだ一行
「空の色が濁りました」と美禰子が云った。

この一行は私の心に強く印象に残った。最初私は、ただ美禰子の独自の表現だと思った。しかし何度も読み返す内にこれは美禰子の心情の変化なのではないかと思った。少し心持が悪かった美禰子を心配して三四郎は美禰子と共に外へ出た。外は静かな秋の空が広がり美禰子は少し落ち着いた。そして一人で外に出るのではなく三四郎と出たことで少し安心したと思う。秋は夏より日が沈むのが早い。綺麗にゆったり落ちていく。その空は辞書にある言葉では言い表せなかったのかもしれない。「外に形容の仕方のない色」という一文を見て思い浮かべたのは私が綺麗という一言でしか表現できない様な秋の夕焼けだ。しかし私が見る事が出来る夕焼けは、水面に映る夕焼けでも地平線に目一杯広がる夕焼けでもなく、視界を遮断するように立っている建物の隙間からだ。美禰子と三四郎が何気なく共に見た景色を私はこの目で実際に見ることが出来ない。作者の夏目漱石はその空をおそらく見たのだろう。そして目に焼き付けたのだろう。手に取るように現代にその夕焼けの美しさが伝わってくる。それが伝わるのは夏目漱石が「空の色が濁りました」という独特の表現を使ったからだ。想像して段々と伝わってくるこの美しさが私の心に響いた。

この一行は夏目漱石の表現の中で一番綺麗で日本語を変幻自在に使いこなす夏目漱石ならではだと思う。そして「綺麗」という言葉ではなく、美禰子が言った「空の色が濁りました」の方が少し重みがあり、その時の空と美禰子の心情を表すのに合っていると感じた。三四郎という物語の中に入り込む様に夏目漱石が一つ一つの単語に込めた意味を探りながらページをめくって行く感覚がとても新鮮で楽しかった。

夏目漱石が書く美禰子を表す表現はとても間接的だと思う。夏目漱石は自分の目に見えた景色を見たまま言っている。しかし美禰子の心情については触れていない。触れていなくても、夏目漱石は自然と移り変わって行く空と美禰子のコロコロ変わる心情を重ね合わせたと思う。例えば、水面に映る夕焼けも、菊人形で客を呼ぶ声も、石に止まった鶺鴒さえも、

その時の風景を表しているのに、美禰子の心情を様々な角度から表現していると思う。そんな夏目漱石と美禰子の目に映った大理石の様な広い空は色んな捉え方があると思った。夏目漱石が直接心情を書かなかったのは、読み手の想像が無限に広がって、共感出来る部分も増える様な読み手に寄り添う形でこの三四郎を読んでもらいたかったからだと私は考えた。

審査講評

漱石が風景描写に美禰子の心情を濃(こま)やかに反映させている様を読み取っている。また、夕焼けの描写など漱石作品の日本語としての美しさ、表現の自在さに感銘を受けているところに感受性の高さを感じる。

東京理科大学賞

三四郎から考える思考の広げ方

恵泉女学園中学校　3年
相川(あいかわ)　遥(はるか)

作品名『三四郎』
選んだ一行
「囚われちゃ駄目だ。」

「囚われちゃ駄目だ。」

私は三四郎に出てくるこの一言が自分の心に残りました。この言葉が出てくるのは三四郎の序盤のシーンです。大学に入る為に熊本から上京してきた三四郎は、汽車の中で出会った、とある人と会話を交わします。この会話の相手は、髭の生えた、不思議な雰囲気を漂わせている男でした。囚われちゃ駄目だというこの言葉の直前、男はある事を言います。熊本より東京は広い。東京より日本は広い。そして日本より頭の中は広いでしょう、と。この言葉は、自分の頭の中にある考えは無限に広がっているから、それを十分に発揮していくべきだと言っていると私は捉えました。私達は日々物を考

えながら生きています。今日世界で起こったことをニュースで聞いた時、仕事や授業を受けている時、さらには家族や友人と話している時でさえ私達は思考を動かしています。私達は考えること無しで生きていくことはありません。その自分の頭の中の考えをより大きく広げていくべきだと言っているように感じました。

この言葉を深く理解するために、囚われるとは何にだろうかと考えてみました。私は、夏目漱石は一つの固定された考えに囚われるなと言いたいのではないかと考えました。一つの固定された考え方とは、思い込みのことなのではないでしょうか。私達は無意識の内に思い込みによって一つの考え方に執着し、新たな考え方を得る機会を逃してしまうことがあります。現に三四郎は、男のこの言葉を聞いてから真実に熊本を出たような心持ちがしたと、同時に熊本にいた頃の自分は卑怯だったと悟ったと書いてあります。三四郎は熊本を出てもまだ熊本にいるような気持ちがあり、男のこの一言に出会っていなければ過去の自分を振り返ることもしなかったのです。この男が三四郎に新たな気付きをもたらしたのです。

誰かが何かのきっかけで自分の価値観を新しくしてくれなければ、古い考えに囚われたままになってしまいます。私達は自ら考えを逐一更新し、より広く深い主張を持っていかなければならないのです。私達には思考力があります。それを使って自分の考えをより深めていくことができます。本を読むこと、他人とコミュニケーションをとることで他人の意見を参考にし、それを基に自分で考えぬくことなど、様々な方法によって頭の中を広げていくことの重要性を夏目漱石は伝えたかったのではないでしょうか。

夏目漱石が言った通りならば、私達は三十七万平方キロメートルを超える考えを持っています。一つのことに固執するのではなく、日々のことから学びを得て自分の頭の中にある考えを限りなく広げていきたいです。

審査講評

一行を自分なりに読み解き、読書、他人とのコミュニケーションにより他人の意見を参考に、自分で考え抜くことの重要性に気付く姿に好感が持てる。

二松学舎大学賞

悲しくない「坊っちゃん」

日本女子大学附属中学校　1年
南（みなみ）　葵彩（あおい）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。

「植木鉢の楓みた様な小人ができるんだ」思わずぷっと笑ってしまった。昨年の秋頃、楓の種を公園で拾い、植木鉢に植えてみた。すると芽が出て、今では小さな苗木となっている。もちろん公園にある立派な楓の木には程遠い。踏んだら潰れてしまいそうな頼りない存在。その表現がとても良く想像できたのだ。「坊っちゃん」はこうした表現の面白さにあふれている。

「坊っちゃん」は、清との絆を軸に、その無鉄砲で愚直な性格が描かれている。疎まれていた幼少期より、良き理解者として側にいた清を東京に残し、四国に教師として赴任。そこで大変な目にあい、結局は職を辞して東京に戻る。そして給料は低くなるものの、家を構え清と一緒に暮らす。しかし、坊っちゃんにとって最愛とも言える清は亡くなってしまう、という所で話は終わる。要約すると悲しい話だ。しかし、読み終えた時、私は清々しい気持ちだった。なぜだろう。

坊っちゃんは口が悪い。赴任先の人々にも、本人が聞いたらいい気がしないような渾名をつけ、赴任先である四国も片田舎というような様子で所々で馬鹿にしている。しかし、何だかクスッと笑ってしまう。温泉は毎日通うほど気に入っているし、狸、赤シャツ、野だいこ、山嵐にうらなり君など、渾名は各々の性格や様子をよく表していて、覚えがいい。

最近学校で、正義とはなんだろうと考える時間があった。私は、お互いに理解し共有してこそ正義であり、そうでなければ、それは独りよがりの考えにすぎないと思った。しかし曲がった事が大嫌いな坊っちゃんには、独りよがりの正義があった。うらなり君が延岡に赴任してしまう際も、自分だけ給料を上げてもらうのは、うらなり君に不人情だと赤シャツの提案を承諾しない。決して世渡り上手とは言えない坊っちゃん。例え誰の賛同を得られなくても、自分の正義を貫く、信念徹底の人だ。赤シャツと野だいこを懲らしめた時は、何だか私まで清々した。でも結局は辞職し東京に戻ることになり、完全には赤シャツ達をやり込められなかった。その点は

私には心残りだ。けれど、裏工作なんてしない、真っ直ぐな坊っちゃんはそれでいい。そうした性格が「坊っちゃん」の話を小気味いいものにしている事は言うまでもない。

そして最後、給料は減り、心の支えであった清も他界。決してハッピーエンドとは言えない。けれど、清が亡くなった事を語るシーン、普通なら心の支えである清を失った坊っちゃんがかわいそうに思えるような所だ。しかし、清に死んだら坊っちゃんのお寺に埋めてくれと「御墓の中で坊っちゃんが来るのを楽しみに待っております」と遺言されるのである。そこでまた吹き出してしまった。死ぬのを待たれるとは！お墓参りしてくれるのを待つとも取れるがそうではないだろう。こうしたユーモラスが「坊っちゃん」を悲劇の物語にしないもう一つの要素なのではないか。

審査講評

ストーリーからみれば悲しい話にもなり得る『坊っちゃん』が、なぜ悲劇にならないかという観点から表現の面白さを論じている。作品の個性をよくつかんだ点が評価できる。

くまもと賞

爺さんが教えてくれたこと

新宿区立新宿中学校　3年
木村（きむら）　日咲（ひさ）

作品名『夢十夜』
選んだ一行
それでも爺さんは「深くなる、夜になる、真直になる」と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った。

「それでも爺さんは『深くなる、夜になる、真直になる』と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った。」これは「夢十夜」第四夜の中の一文だ。私はこの一文が心に響いた。

「夢十夜」には十の夢の世界が描かれており、ほかの作品とは違う幻想的で独特な世界観が漂っている。それゆえに、読んでいて疑問に思う場面も少なくなかったが、夢の話なので解釈が色々できるのが面白い。読者に解釈を委ねるような自由な雰囲気が心地よい。

第四夜は子供である「自分」がとある部屋の中にいるところから始まる。部屋の片隅では爺さんが一人で酒を飲んでい

る。そこに神さんが出てきて爺さんに質問するのだが、その返事はずいぶんといいかげんなものである。年齢を聞けば「いくつか忘れたよ」と言い、家を尋ねれば「臍の奥だよ」と答える。爺さんは自分の年齢がわからない。ただ酒を飲み続ける。だが、行き先は決まっている。「どこへ行くのかね」との問いに「あっちへ行くよ」と答え、爺さんはそのまま河原の方へ真直に歩き始める。「自分」もついて行くのだが、爺さんは途中で持っている手拭を蛇にすると言って笛を吹きだす。「草鞋を爪立てる様に、抜足をする様に、手拭に遠慮をする様に、廻った。怖そうにも見えた。面白そうにもあった。」私はここの部分が人生そのものの表現にように感じた。結局、手拭は蛇にはならず、爺さんは河の岸まで振り向くこともなく真直に歩き、姿を消してしまった。ゴールに着いたというわけだ。

爺さんのスタートは臍の奥、つまり人間が生まれる場所。爺さんは自分の年齢が分からない。自分を見失っていたのかもしれない。しかし、人生のスタートからゴールまで、上手くいかないことがあっても、面白くても怖くてもどこまでも真直に歩いて行った。振り向くこともなく、戻ることもなく。つまり、爺さんは人生そのもので、「人生は一度きりで、戻ることもやり直すこともできない」ということを子どもの「自分」に、そして私たちに教えてくれたのではないかと思った。

これが私の解釈だ。

現在私は十四歳。人生が始まってからこれまでも、たくさんの悩みや面白いとき怖いときがあった。中学三年生の今はちょうど進路選択の時期だ。目の前にはたくさんの分かれ道があり、「これで合っているのか」と自分に問いかける日々を送っている。さらに、秋の陸上大会に向けた練習ができなくなり、周りの人たちにすっかり遅れをとってしまった。孤独を感じ、自分を見失った。何度も逃げたくなった。そんな時にこの爺さんに出会ったのだ。「『深くなる、夜になる、真直になる』と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った」爺さんは、人生について教え、私の背中を押してくれた。だから心に響いたのだろう。これからの長い人生、私は自分で選んだ道をゴールまで、真直に歩み続けることを決心した。

審査講評

構成がしっかりしており、作品を読んだことがない人も読みたくなる感想文。また、一行の解釈への思考過程に瑞々しい感性を感じる。自らの悩みに引き付けた最後の文章も清々しい。

佳作

書くことより想うこと

暁星中学校　1年
坂崎（さかざき）　優斗（ゆうと）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
清の注文どおりの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。

「清の注文どおりの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。」

この一行は、僕が『坊っちゃん』を読んで一番心に残った文です。

この一行には、主人公坊っちゃんの清への愛情がとても表われています。もっと詳しく書いて、清を喜ばせたいと思えば思うほど書けなくなるのです。現代の僕から見ると、内容はともかく、自分が元気でいることだけでも書いて、清を安心させたいと思うのだが、この後、坊っちゃんは清へ手紙を書きませんでした。

「清の身を案じていてやりさえすれば、おれのまことは清に通じるにちがいない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要ない。」と。

坊っちゃんは持ち前の短気で乱暴な性格のせいで、家で除け者あつかいされ、病気の母には亡くなる二、三日前にも怒られ追い出されたため、死に目にも会えなかった。清は、そんな坊っちゃんを無条件にかわいがってくれて、将来を楽しみにしてくれた。家庭は裕福だったが、両親から愛情を感じていなかった坊っちゃんは、手紙などの物で表わす愛情よりも、心で相手を想う「愛情」を大切にしていたのではないだろうか。

次に清のお話が出てくるのは、物語の最後です。四国で色々なトラブルがあり、教員を辞めて東京にもどった時でした。下宿にも行かず、真っ先に清に会いに行ったら、清は涙をぽたぽたと落として喜んでくれました。昔の坊っちゃんなら、おせじじゃないかと疑ったりもしたが、ここで初めて「おれもあまりうれしかった。」と素直な気持ちが書いてあります。初めて坊っちゃんと清の心が通い合った瞬間でした。坊っちゃんはそこで、東京で清とうちを持つんだ、と言います。

のちに、清は肺炎で死んでしまいますが、死ぬ前日に「清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めてください。お墓の中で、坊っちゃんのくるのを待っております。」と言われたの

でその通りにしたそうです。普通、自分の家の墓には家族の骨を埋めます。それを分かって清はお願いしたんだと思います。清のまことは坊ちゃんに通じました。坊っちゃんにとって清は大切な家族になりました。清の「愛情」は、坊っちゃんの心の中で生き続けることでしょう。

坊っちゃんはその後、どんな人生を歩んだのでしょうか。僕が思うに、街鉄の技手を続けているが、持ち前の性格のせいでいつまでたっても平社員のままである。赤シャツに似た上司はいるが、やまあらしのような同僚に恵まれ、天ぷらそばを食べて戦っている。清に似た雰囲気の奥さんとかわいい娘に恵まれた。長期出張の時は奥さんから「手紙くらいよこしなさいよ。」と言われるのでした。

佳作

僕が先生に言いたいこと

神戸大学附属中等教育学校　1年
神原（かんばら）　悠一郎（ゆういちろう）

作品名『こころ』
選んだ一行
この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。

僕の選んだ夏目漱石の「こころ」の一行は「この手紙があなたの手に落ちる頃には、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに死んでいるでしょう。」だ。

僕がまず感じたことは、この遺書をもらった私はさぞかし動揺したことだろう、そして先生の告白を、妻への秘密を、なぜこれから背負って生きなければならないのかと苦悩しただろう、ということだ。

もし僕が私であったならば、先生には命を引きずり続けてでも生きて欲しいと伝えるだろう。もし本当に妻を愛しているのならば死ぬという選択肢はないはずだ。全ての罪を私に

告白し、私には止める権利も与えられぬまま、自らの命を絶つのはあまりにも身勝手すぎるのではないか。

それに僕は、先生は卑怯な人だと感じた。お嬢さんへの想いを打ち明ける友人Kに対し「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放つ。これはKにとって一番の言って欲しくない言葉であり、Kのお嬢さんへの想いを徹底的に打ち砕くものである。さらに先生は追い打ちをかける。Kの気持ちを知りながら出しぬけにお嬢さんに結婚を申し込むのだ。

しかしKは2人の結婚を知った後も、先生に対し以前と変わらない様子で接する。そんなKに先生は「俺は戦略で勝っても人間としては負けたのだ」と、Kを立派に思い、自分が恥ずかしく思う。僕はきっとこの時がKに自分の弱さを打ち明け、Kからも、そして自分自身からも許されることのできる最後のチャンスだったのではないかと思う。

翌朝、Kはみずから命を絶つ。

自分が殺してしまったのも同然だ。自分はKと話し合う勇気さえ持つことが出来なかった。自分にとって大切な存在であったKを裏切ってしまったという自責の念とともに、先生の心の奥底に眠る、人に対する不信感という魔物に抗うことが出来なかった、先生は自分に負けたのだ。

その後、先生はKを自殺に追い込んだ罪悪感と、自分の弱さ、自らの卑怯さに苦しみ続けながら死んだつもりで生き続けるが、乃木大将の死に直面し、乃木大将は私と一緒ではないか、自分だけが生きていて良いのだろうか、という思いに駆られるようになり、自殺を決意する。この世に一人、妻の純白だけを守り、この世を去るのである。

「こころ」は、Kと先生が命を絶つ悲しい結末を迎える。しかし物語の中に垣間見る、人間の裏切りや身勝手さ、弱さは、誰の心にもある身近な感情なのではないだろうか。

先生は卑怯な人だ。もし私を本当に真面目な人間だと信じて全てを告白してくれたのならば、Kへの妻への罪を背負い続けながら、私と共に生き続けて欲しかった、と僕は伝えたい。

佳作

坊っちゃんと清、僕と祖母の未来

済美平成中等教育学校　2年
阪上（さかうえ）　周翼（しゅうすけ）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
この婆さんがどういう因縁かおれを非常にかわいがってくれた。

僕は、祖母と暮らしている。祖母との生活は、愛情を感じ、感謝をする日があれば、祖母の言葉に深く考え悩む日もある。祖母が僕に「この家を継いでね。」「子供には抱かなかった執着がある。」と言ってくることを聞くと祖母は、僕を嫌いではないのだと思う。でも、どうしてこんなことを言うのだろうと僕が複雑な気持ちになることもある。僕は『坊っちゃん』を読んだときに、坊っちゃんが清に対して抱く感情に少し自分と似た部分を見た気がして、とても印象的だった。僕は、「この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がってくれた。」という一行に、人は「因縁」に結ばれているのか、坊っちゃんと清の関係は、僕と祖母の関係とは少し違うけれど、これからどうなるんだろうと興味を持った。

僕の祖母と清とは、似ていないと思っていたが、何度か本を読むうちに、似ているところをいくつか見つけた。例えば「周君はいい子。」「周君は、ばあちゃんが育てたからすごい人になると思う。」など、根拠のないことを言うところ。坊っちゃんも清の言葉について「清にも別段の考えもなかったようだ。」と気づく。しかし、清に「家を持ったら置いてください。」という旨を何度も言われるうちに「おれもなんだかうちがもてるような気がして」と自信を持つ瞬間がある。僕にも、小さい頃そんな瞬間があったことをふと思い出した。

そのほかにも、清が清のおいに、ときに一人で決めて一人でしゃべるところ。僕の友人や友人の親、先生に対して、祖母は頼んでもいないことを勝手な話までつけ足し話すので、僕も坊っちゃんと同じく閉口することが多くあった。

坊っちゃんが四国へ発つ前に訪ねると、風邪で寝ていた清。僕の帰りを待ちながら、転寝をしていて起き上がる祖母と同じように、坊っちゃんにも小さく見えたのかなと思った。ときどき祖母は、清が坊っちゃんに「もうお別れになるかもしれません。」と小さな声でいったように、「ばあちゃんは、いつ死ぬかわからん。」と言う。今はまだ、現実味がないけれど、いつか、僕が大学進学などで祖母のもとを離れることになっ

たとき、僕は坊っちゃんと同じように、この言葉に涙をこらえるのかもしれない。そのとき、きっと祖母は清のように、あれこれいらないものを渡してきたり、世話をしたりして……、そんな姿も目に浮ぶ。

坊っちゃんと清、この本の最後は、「清」の話で結ばれる。東京に帰った坊っちゃんは、下宿には寄らず、清のもとへ行く。涙をこぼす清、二人は一緒に暮らし、お墓で待っていると告げ、清は他界する。一瞬、清が恋人のようにも感じられる最後、「因縁のその先」は予想外だった。でも、坊っちゃんと清との関係に、僕は、複雑な気持ちもある今の先に、祖母孝行できる日が来るかなと、明るい気持ちになった。

佳作

「夢」とは何か

筑波大学附属中学校　1年
志村（しむら）　由梨（ゆり）

作品名『夢十夜』
選んだ一行
こんな夢を見た。

「夢十夜」を読んで一番印象に残ったのは、「こんな夢を見た。」である。

全夜を通して人間の生死について書かれていて、恐ろしい感じがするが、そもそも夢の話なのでつじつまが合わず世界観がとらえにくい。そのなかでこの一文だけは目覚めている現実世界からの言葉であることが明確で、数夜の話にわたって繰り返し用いられているので、自然にはっきりと意識づけられた。

私が見る夢は、これらのように難解でとらえどころのないものではなく、昼間に体験したことや読んだ本の内容がベースになっている。目が覚めた後に、「こんなことがあったから、

こんな夢を見たんだな。」と夢を見た理由がわかるものが多い。

そう考えると、夢には理由があると考えることができる。漱石は、この夢で何を伝えようとしていたのか、なぜ夢の話として書いたのか、と疑問を持った。わざわざ夢の中での話として書かなくても、作品に込める思いをストレートに分かり易く表現することもできるのに、なぜそうしなかったのか。私の理解力や想像力が及ばないことが原因だが、わからないことが多すぎる。

第八夜と第十夜は、庄太郎という人物でつながりがある。第八夜では通行人の一人として登場し、第十夜では、はなしの中心になっている。けれども庄太郎は第八夜では鏡に映っているだけだし、第十夜では、健さんの世間話の話題になっているだけで、どちらも他者の目を通した存在として描かれていて、間接的で遠回しな感じがする。「こんなことがあった」、と庄太郎本人が語っているのであれば、私はもっと漱石が何を言いたかったのかが分かり易かったと思う。なぜ漱石はそうしなかったのか。

全体的に漠然としていて筋道がわからない感じで読み進めていく中で、例えば第一夜の女が転生した百合の描写はとても詳しい。第三夜の子どもを森に捨てに行く途中にある石に書かれた文字の色も単に赤色ではなく、井守（いもり）の腹の赤と書かれている。どちらも目の当たりにしているのかと思ってしまうほど具体的で細かな描写で、ありありと光景が浮かんでくる。

「こんな夢を見た。」と同じで、ここだけ夢の中のことではなく現実世界のように感じられた。

漱石は「夢」にどんな理由、思いを持たせたかったのだろうか。

曖昧で筋道が通らない遠回しなものは、異性や我が子、他の人とのかかわり、人の生死、才能の評価、身の回りに起こる様々な出来事である。つまり、世の中のほとんどが、まるで「夢」のようである。私たちは「こんな夢をみている。」のである。確かなものは目の前にある美しい百合、井守の腹の赤である、と言いたかったのではないかと思った。

佳作

坊っちゃんと清

筑波大学附属中学校　2年
渡井（わたい）　結月（ゆづき）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
おれもあまりうれしかったから、「もういなかへはいかない、東京で清とうちをもつんだ。」といった。

正義感が人一倍強く、情に厚い誠実な性格。しかし軽はずみで向こう見ずなものだから、いつも損ばかりしている。

この作品で描かれている教師生活は、まさにそんな主人公の坊っちゃんの人柄を良く表したものだと思う。卑怯でずる賢い上司や、人の機嫌をうかがってばかりの臆病な同僚、人を小馬鹿にしたような言動の目立つ生徒たちと過ごす中で起こる、滑稽な騒動を経て、堀田の辞職に影響を受けた坊っちゃんは、赤シャツや野だいこに日々の鬱奮をぶつけ、辞表を校長に叩きつける。私が選んだ一文は、松山から帰京した坊っちゃんが、清に向けて放った台詞だ。

そもそも、物語の序盤では、坊っちゃんは清が何故自分に良くしてくれるのか疑問に思う程度だった。しかし、この台詞に表されているように、帰京した後には清をとても大切に思っていることが分かる。また、中盤、坊っちゃんが生徒にいたずらを仕掛けられ、落ち込んでいた時に零した台詞に、「なんだか清に会いたくなった。」というものがある。この場面では、今まで別段気にもとめていなかった清の親切が、とてもありがたいものだったのだという坊っちゃんの気付きが描かれていて、彼が四国で揉まれるうちに、清に対する心情の変化があったということが分かった。不器用で対人関係がうまくいかない坊っちゃんは、悩むたびに血のつながりがないのにも関わらず異常なまでの愛を注ぐ清の事を思い出す。そうして坊っちゃんは次第に、ありのままの自分を褒め、無条件に愛してくれる清に対して大きな感謝を抱くようになったのではないか、と感じた。おそらく、坊っちゃんは愛に飢えていたのだと私は思う。兄ばかりひいきする母と、坊っちゃんを些とも褒めてくれない父に育てられた坊っちゃんにとって、清は異質な存在だったのだ。だからこそ、清の愛を受け止めるのに時間がかかったのだろう。教師生活で、坊っちゃんが清に幾度となく救われてきたことは言うまでもない。そのため彼は、帰京してすぐ、下宿にも寄らずに、清に感謝を伝えようと考えたのだ。情に厚い彼ならではの行動だ。

「おれもあまりうれしかったから、『もういなかへはいかない、東京で清とうちをもつんだ。』」彼が言ったこの一文には、坊っちゃんと清の愛や感謝が溢れている。だから私はこの文が好きだ。

佳作

創痕

長野清泉女学院中学校　3年
小根澤（おねざわ）　悠希（ゆき）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
しかし創痕は死ぬまで消えぬ

私が「坊っちゃん」を読み終えて最初に思ったことは、主人公の坊っちゃんは、とても純粋な人なのだなぁということだった。

他人の言葉を額面通りにしか受け取れないとか、馬鹿がつくほど素直とか、正直者とか、曲がったことが大嫌いといった印象からも、ようするに彼は純粋な人間なのである。それゆえ子供のころから目を疑うようなエピソードが満載であり、大人になって社会に出てからも周囲の人といざこざが絶えなかったのだろう。しかし、私はこの純粋ゆえに破天荒でどこか不器用な坊っちゃんが憎めない。もし、彼のような人が身近にいたらなにかと厄介なトラブルがあるかもしれない

けれど、これほど人間味に溢れた人柄は、殺伐とした現代社会に於いて、一石を投じて風通しをよくしてくれるのではないだろうかと想像する。

さて、私が物語を通して最も印象に残った一行は、冒頭の章に出てくるナイフで指を切ってみせる描写とともに書かれた「しかし創痕は死ぬまで消えぬ」という一行だ。その場面を取り繕ったかのようにみせる表現でありながら、実は主人公の本音に寄り添った一行ではないかと思わずにはいられないからである。

幼い頃に死別した両親のこと、二度と会うことがなくなった兄のこと、売り払われてしまった玄関付きの実家のこと、転々とせざるを得なかった居候先、勤務地での複雑な人間関係、そしてようやく戻ってきた東京で迎えた清の死、いずれも坊っちゃんの心に痛みを与えた出来事である。しかし、それでも時とともに、また坊っちゃんの純粋さゆえの行動で乗り越えながら物語は進んでいく。それでもやはりどこか心の奥底には創痕が残り続け、それは生涯消えることはなかったのではないかと推測する。

この物語に限らず、人が外部から受けるダメージは外傷的なものは比較的早く回復することが多いが、心の傷など心理的なものはなかなか消えないと思う。もちろん、誰かの心ある言葉や佳き出会いなどが創痕を癒したり和らげてくれることもある。この物語でいうならば、うらなり君や山嵐との出会いや、結果的には敗北してしまったが、正義感をもって赤シャツと野だいこをこらしめるために山嵐と挑んだ経験、幼い頃から見守ってくれていた清の存在であろう。私自身はまだ坊っちゃんのような波乱万丈な経験は無いけれど、小さな失敗で傷ついた経験は幾つもある。他人から見たら些細な事がいつまでも尾を引く事も稀にあるし、ほんのひと言で心底傷つくこともある。逆に言うならば、誰かのたった一言や誰かの存在によって創痕がいとも簡単に癒えてしまうことだってある。この一行からそんなことを感じて物語を読み進めた。

果たして坊っちゃんは生涯創痕を残したままだったのだろうか、それとも生涯をかけて創痕が癒えていったのだろうか。いつの日か養源寺で問うてみたい。

佳作

絶えがたい可笑しみ

日本女子大学附属中学校　1年
澁谷（しぶや）　実生（みき）

作品名『永日小品（元日）』
選んだ一行
しばらくすると聞いているものがくすくす笑い出した。自分も内心から馬鹿々々しくなった。その時フロックが真先に立って、どっと吹き出した。自分も調子につれて、一所に吹き出した。

フロックに黒紋付、屠蘇、謡、とこの作品は厳かに正月を迎えているところから話が始まる。まず年始の挨拶に来た三、四人の男は漱石の弟子であろうか。そこに高浜虚子が車に乗って挨拶にやって来た。話の流れで漱石と虚子が二人で謳い、さらに虚子が鼓を打ち、漱石が謡うということになった。鼓をかんかん言う七輪の炭火の火で焙り、張切った皮の上をかんと弾く仕草に、その場の緊張感や居合わせる人達の興奮する様子が伝わってくる。読んでいる私まで緊張してきた。一方で漱石は「少し待ってくれ」と頼んだ。張り詰めてきた雰囲気にいささか尻込みをしてしまったのだろうか。しかし「合点の行くまで研究していれば、二、三時間はかかる」と判断し、好い加減のところで了承してしまう。さて、歌い出したら、どうにも出が良くなかったようで、虚子の鼓に威嚇され漱石の謡はだんだんひょろひょろとした小さな声になってしまった。この時の漱石の心情は、今風の言葉で言うと「もうどうにでもなれ!!」といったところであろうか。その場の雰囲気を変えたのは、聞いていた者のくすくすとした笑い声と、フロックのどっとした吹き出しであった。漱石自身も、「内心から馬鹿々々しくなった」と書いてある通り、厳かな雰囲気がくすくすとした笑い声により一瞬でコミカルなものへと変化した。

私は、この場面を想像し、自分がこの場に同席していたら、あまりにも可笑しすぎて一番先に大爆笑してしまうだろうと思った。人が本気で困っている時には笑えないが、そうではない場合は、場が真面目で皆が一生懸命な時ほど私には可笑しく感じられるからだ。小学校の時の運動会で、学年が一体となって演技するリトミックがあった。皆、真剣に一瞬の動きに集中して、先生の動きを頑張って取得しようと頑張っているなかで、私は周りの人が真剣に取り組む姿やピンと張り詰めた雰囲気を感じるにつれて何故か急に可笑しく思われ

て、笑いを堪えるのにとても苦労した。でも周りの人達が作っている雰囲気を壊してはいけないと思い、私はリトミックの練習どころではなく笑いを堪えることに必死だった。笑ってはいけない場や周りが真剣な時に限って余計に可笑しく感じられてしまうというのは、分かる人には分かってもらえるだろう。

漱石は謡について聞いていた者から散々な批評を受けたものの、一同が笑い、虚子も微笑し自分の鼓に自分の謡を合わせて歌い納めた、ということで、その場に居合わせた人達の関係性が良いことが読み取れる。細君が虚子の襦袢の色を賞め、それを漱石は「決して良いとは思わない」と不貞腐れるように言うことも、弟子が漱石の謡を冷やかしたりしても、この話の根底にはくすくすという笑い声が来こえて来そうな可笑しさと、また「元日」という目出度さも相まり、とても愉快な読後感に浸ることが出来る。

佳作

魅力が詰まった無鉄砲

日本女子大学附属中学校　1年
馬場（ばば）　百花（ももか）

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行
親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。

私が「坊っちゃん」の中で一番印象に残った一行は「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。」という冒頭の一文だ。

私の坊っちゃんとの最初の出会いは小学生の頃だった。祖父が私に坊っちゃんの文庫本を贈ってくれた。ただ、当時まだ私は小学生。夏目漱石の良さは正直なところ分からなかった。しかし、この一文だけは深く印象に残っていた。それは、今考えると何事にも実直な主人公に対して、深い魅力を感じたからかもしれない。その魅力とは一体何なのだろうか。

日本人は、周りの和を乱さないようにするため、対立することを嫌い、物事を穏便に済ませることを優先する民族だと

聞いたことがある。しかし、主人公はそのような日本人の典型的な性格と真逆である。平均的な日本人が持っていない部分だからこそ、より読み手を惹きつけるのではないだろうか。

では、なぜ日本人はこの主人公のような性格になろうとしないのか。体制や社会に反抗する人間は、様々な争いに巻きこまれることになるし、辛い目にあうことも多くなるだろう。それに比べ大多数の日本人は和を乱すことを嫌うため、社会に順応しやすいのではないか。

この主人公は、私達とは違う生き方をするから、読み手に魅力的に映るのだ。

ところで、主人公と山嵐は卑怯者の野だいこと赤シャツを懲らしめたあと、学校を辞めこの地をはなれていく場面は、主人公を完全に勝たすことはせず、現実味を入れる、夏目漱石のアイデアや魅力が沢山詰まっている印象的な場面だと感じた。最終的に主人公が悪をやっつけて「ハッピーエンド」なんていうのはよくある話だが、夏目漱石は主人公の潔く真っ直ぐな性格を理解し、描写した上で、この地を離れることとなる主人公に普通とは違う展開を与えた。主人公がお決まりのように悪を倒して幸せになるというような話ではなく、主人公の性格も踏まえ、現実味を出す、少し変わった描写を楽しめる「坊っちゃん」という一冊の本から、夏目漱石の魅力、面白さがやっとわかった。

「無鉄砲」の意味は後先考えずにむやみに行動する事。最初は「坊っちゃんはやんちゃなのか」という先入観があり、自分の中で勝手に納得していたが、読み進めていくうちに自分の中で坊っちゃんの「無鉄砲」の印象が変化していった。坊っちゃんは私達がなかなかできない生き方をしており、日本人の典型的な考え方にとらわれず、首尾一貫して自分というものをもっている。

坊っちゃんの中の「無鉄砲」とは、とにかく真っ直ぐで潔い主人公の魅力が沢山詰まった一語なのだ。

高校生の部

最優秀賞

二人が共有した心持

光塩女子学院高等科　2年
大隅（おおすみ）　咲喜（さき）

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
どうして私の悪口を自分で肯定するようなこの挨拶が、それ程自然に、それ程雑作なく、それ程拘泥わらずに、するすると私の咽喉を滑り越したものだろうか。私はその時透明な好い心持がした。

私たち読者は、作者の人柄をその作品を通して推断する。私は何作か漱石の作品を読んでいたが、特に『こころ』の印象が強かったのだろうか、漱石に対して厭世的な作家、という印象を持っていた。そんな漱石の印象を、私の中で大回転させたのがこの一文である。

『硝子戸の中』を読んでいくにつれ、漱石の虚偽や下心を嫌悪し、ありのままの心に接した時に充足を得る、という潔癖すぎる一面が明らかになっていった。そんな漱石の畏友太田達人は、その漱石をして「敬愛に価する長者（ちょうしゃ）」と言わしめるほどの素晴らしい人格者であったという。

私が選んだのはそんな旧き友と、漱石との再会の場面での一文だ。漱石が普段客を迎える時と同じように達人を迎えるべく座敷へ行き端座していると、後からやってきた達人は開口一番、「いやに澄ましているな」と、からかいの言葉を漱石へ投げかける。旧交を温めるのにこれほど相応しくない言葉はそうないだろう。「久しいな」でも「元気か」でもない。からかいが混ざった言葉だ。それに対して漱石は、彼の言葉が終わらないうちに「うん」という返事を口にする。私はこの箇所に微かな違和感を覚えた。しかし漱石の性格を考えると、ただ旧友との再会が嬉しくて、というだけで素直に達人のからかいを肯ったとは思えない。この短いからかいには達人の、畏まる必要のある関係ではないだろう、という漱石への語りかけが含まれているのではないだろうか。きちんと迎えてくれるのは嬉しいが、作家と客の関係ではなかった、あの頃の関係が心地良いと私は思っているのだよ、と。そして、漱石はその思いを正確に理解したのだ。

旧友との久しぶりの再会は、如何に神経が太い人でも緊張するし、変な見栄を張ってしまうこともある。時が奪い去った過去の片鱗を相手の中に見出そうと必死になるあまりぎこ

ちない雰囲気になることもあるだろう。しかし、達人はそんな時の力による関係の歪みから生じる緊張や見栄を「からかう」ことで取り去り、漱石もまた素直な「うん」という返事の形で達人に答えてみせたのではないだろうか。漱石は、達人のその意を汲み取った瞬間、柵(しがらみ)も夾雑物もなかった、ただひたすらに純粋な青春時代へ戻ったような「透明な心持」を味わったに違いない。

人は時の前では圧倒的に無力だ。時は私たちを癒し、また或時は残酷に大切な物を奪っていく。愛犬との別離や変化していく早稲田の街並み、それらを経験し目の当たりにしていた漱石だからこそ、時の強大さが身に染みていたに違いない。そんな中時を軽々と超えてきた友人の姿はどれ程漱石の心に安寧を齎(もたら)したことだろう。北の大地へと旅立つ友への想いには、別れへのほろ苦さと、達人なら大丈夫という、漱石の自信があったと思う。なぜなら漱石と達人はかけがえのない青春時代と「透明な心持」を共有した仲なのだから。

審査講評

再会のやり取りから漱石と太田達人の心の機微をとらえ、うまく言語化している。些細なやりとりにここまで考えを深めたことが秀逸。構成力もあり、文章も優れている。

朝日新聞社賞

言語化された自分の感情

東京都立桜修館中等教育学校　2年
磯田(いそだ)　颯人(はやと)

作品名『こころ』
選んだ一行
苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤いを与えてくれたものは、その時の悲しさでした。

私はこの一文を読んだ時に、一つ疑問に思うことがあった。それは、苦痛や恐怖と同様に悲しみも負の感情であるにも関わらず、なぜ悲しみが心に潤いを与えたのかということである。この一行は、作品の主人公が先生と呼び慕う人物の言葉であり、先生の友人であるKが自殺した後の場面で彼から発せられたものである。苦痛と恐怖で握り締められた心に、悲しさが追い打ちをかける、というのが納得のいきやすい描写であろうものを、潤いと表現されていることには、どのような意図があったのだろうか。この問いに対する答えとして、端的に言えば人間らしい感情が浮かんできたことに対する安

堵の表れが潤いなのではないかと私は考える。先生とKは同じ女性を狙う恋敵の関係であり、先生はそのことをKよりも深刻に捉えていた。それが故に、先生はKが死んだ時、恋敵がいなくなったことに喜びのような感情を少なからず持ったのではないだろうか。Kが自殺する前、恋心をもとにその先へ進むべきか、それとも退くべきかという相談をKからされた時でさえ、先生は自分に勝機があるかどうかだけに焦点を置いていた。Kの相談に親身になって乗ることができないほど女性に夢中だったのだろう。一行の中にある恐怖や苦痛は、あくまで友人として共に生きてきたKの死を、喜びのような感情を持って受け入れた自分自身に対するもの、または冷静になって自分がKを自殺へと追い込んだと自覚した時に生まれた罪悪感の表れだと考えられる。しかしそれらはなんらKの死を悼む感情などではない。Kが先生に遺した手紙を発見した時も、自分に非があることが女性や他の人物に知られて軽蔑されることを恐れ、いち早く内容を確認するほどであった。しかし女性や3人と共に暮らす女性の母が彼の死体の前で涙する場面を目撃し、ようやく悲しい気分になることができたのである。今まで非人道的な感情や思考が先生を動かしていたため、初めて人間らしい感情を持てたことに安堵したのではないだろうか。それが彼にとって、潤いと呼べるものだったのだろう。

私も先生と似たような経験がある。他人の成功を率直に喜べないような私は、そんな自分に嫌気が差すことも少なくない。それでも成功を喜ぶ人を目前にすると、喜ばしいと思える自分が時々姿を現すのである。そのような自分に出会えた時、私は人間らしい感情を持てたこと自体に安堵し、心に潤いを感じる。先生が放ったあの一行の言葉も、そんな心の内の変化を表すものだったかもしれない。私は、心の内を言葉に表すことが得意ではないが、彼の言葉によってそれが簡単かつ明瞭に表されたような気がした。彼の言葉は私の心に長く残り続けるだろう。

審査講評

個性的な視点で作品をとらえている。人間の情意面を深く見つめることが出来ており素晴らしい。また、それが自己の経験に基づく視点であることもうかがえる。

紀伊國屋書店賞

わたしの一行

光塩女子学院高等科　2年
岸本（きしもと）　幸千（さち）

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
私は帰って硝子戸の中に坐って、まだ死なずにいるものは、自分とあの床屋の亭主だけのような気がした。

私は、気付かぬうちに移り変わってしまう世の中に、ポツンと取り残されたような心地がしてしまう筆者に深い共感を覚え、強く心を動かされた。自身は何も変わらず、硝子戸の中に坐っているというのに、思い出の人は知らぬうちに二度と会うことの叶わない存在になってしまう。私はこの一行から、そんな世の無常を感じた。

そもそも、人生は脆く儚い夢幻なのだ。命の灯は、気付いたら明るく周囲を照らしているのに、気付いたらふっと消えてしまう。私も筆者のように、自分だけ置き去りにされたような孤独を感じた経験がある。

数年前、私の親友は自らの意志で彼女の人生に終止符を打った。他愛ないいつもの会話のあと、また今度、と別れた日を最後に、私がこの世で親友と顔を合わせることは二度とない。くだらないメッセージのやり取りも、思い出が詰まった写真も、誕生日にもらったプレゼントや手紙も、年賀状も、なにもかもが完璧に揃ってここにあるのに、親友だけがふっと私の前から消えてしまった。私は、今までもこれからも変わらない「日常」を生きる。それなのに、親友は見えないところで葛藤を抱え、雲を霞と遠くへ消えてしまった。自分の一部も、親友の命と一緒になくなってしまったような気がするほどの大きな虚無感に苛まれ、遣るせない気持ちでいっぱいだった。

私たちは、他者の生死には介入できない。いくら大切に想っていようと、踏みこむことはおろか、触れることすら叶わない。純粋で孤高な絶対領域である死は、残された人の心に大きな喪失感を残す。この一行は、その喪失感を具体化したものであるように感じた。人はいつか必ず死を迎えるもの、とわかっていても、大切な人の訃報を受けたときの取り残されたような寂しさは計り知れない。記憶を辿れば蘇る、故人の声も、顔も、全部がすでに過去のものとなってしまっている。突如つきつけられるその現実は、心を深く抉るだろう。それに加え、床屋の亭主に聞くまで、御作が亡くなっていること

すら知ることができなかった疎外感は、心を蝕むに相違ない。

寂々たる硝子戸の中で物思いに耽り、広い世界にただ二人残されてしまったように感じた筆者。彼は、そのやり場のない思いを文章に委ね、居た堪れない感情を整理しようとしたのではないだろうか。漱石は過去に、幾度も身近な人を失っている。多くの大切な人を無慈悲に奪われてきた彼だからこその一行に触れ、私自身も、生きているうちに身近な人を大切にしようと強く感じるきっかけとなった。この世はいつも無常だから。

審査講評

選んだ一行と重なる親友を自死で失った経験を丁寧にたどり直して、無常な世の中だからこそ、身近な人を大切に生きようという思いを固める姿に感動した。

新潮社賞

はんぱなラブ、はんぱな生

東京都立桜修館中等教育学校　2年
岩井（いわい）　紫音（しおん）

作品名『こころ』
選んだ一行
つまり私は極めて高尚な愛の理論家だったのです。同時に尤も迂遠な愛の実際家だったのです。

私には推しがいる。彼女を見ていると元気になる。同じ元気をもらっている人を見つけたいと思い、よくツイッターを覗く。数多（あまた）ある呟きの中でも目立つのは、私よりもずっと推しについて詳しい人や、大量のグッズを集めている人など、玄人の雰囲気がする人たちである。私はそれを見て、自分の好きを少し恥じる。真のファンはこういう人たちなのだなと思う。これほど行動できるような好きを持てない自分を中途半端に感じる。時間の経過とともにその価値観は身に染みていく。いつしか友達に「この人が推しなの？」と尋ねられ、「や、全然グッズとか買ってないし、にわかだよ」と笑って答える

自分になっている。

私はよく「友達がいない」と妹にぼやく。なぜと聞かれ、誰といても楽しくない、と答える。私はいつも誰かと一緒にいるとき自分を作ってしまう。この人は映画好きだからこの話はつまらないかな、この人は明るい性格だからたくさん話題を振ろう、なんてふうに、相手の性質を分析してから自分の行動を決めている。だから常に自分の本心が置き去りにされているような気持ちになる。言えない友達や世界を恨んだりもする。しかし振り返ってみれば、私は勝手に自分に制約をかけているだけで、別に誰にも「私に合わせて」とは頼まれていないのだ。

学校の課題で『こころ』を読んで、前述した文章にぶち当たったとき、まさに私だと思ってビリビリした。この文章の意味はおそらく「愛を実践することへの自信のなさから理論に固執する」ということだ。誰かを好きだと言うことに臆病で、もっとよりよい愛に到達してから言葉にしたいとか、この程度の人は愛するに足りないとか思う。自分に自信がないから理想に踊らされるのだ。そうやって抑圧されるほど、自分をみてほしいという思いがふくらむ。だから行動に移すのだが、そういう中途半端な好きは大体、ひとりよがりで滑稽な形になる。こういうもどかしさはもしかしたら、インターネットが普及した世代だからこそ強く感じるものなのかもしれない。

『こころ』の主人公である先生は結局、そういう状態から脱することができないまま生を終える。よりよい愛を抱けないと自覚しているのに、愛を叶えたいという思いも捨てられず、それがKを追い詰めたのだと解釈し、自分に絶望したのだと思う。

だが私は死ねないから、受け止めることにしようと思った。『こころ』を通して、私は自分の愛情の脆弱性以外にも気付いたことがある。私は先生のように絶望できるほど、周りを眩い光のように見なせない。自分が死んだら悲しむ人たちがいることに容易に気付ける。ならば、より楽に生きるために、自分をみてほしい思いや自信のなさを、受け止めてやろうと思った。本当はソーダじゃなくて水が飲みたいと言えなかった自分を抱きしめること。中途半端でも今好きな人を好きと言うこと。

そういう強さで、私は先生の屍を越える。

審査講評

自分の「推し」に対する「はんぱなラブ」＝愛情の脆弱性と同期させながら、先生の「はんぱな生」を浮き彫りにしている。「中途半端でも今好きな人を好きと言う」と決意を示した上での結語も見事。

東京理科大学賞

漱石が現代人に教えてくれること

光塩女子学院高等科　2年
味原（あじはら）　咲希（さき）

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
そんなら死なずに生きていらっしゃい

「そんなら死なずに生きていらっしゃい」これは「硝子戸の中」にある、女の告白の一節である。

漱石のところへ、ある女が訪問してくる。女は悲痛な人生を漱石に告白したあと、このように問いかける。もし漱石が小説を書く場合、その女の始末を死ぬように書くか、生きているように書くか、と。「その女」と表現しているが、実際は自分が生きるべきか死ぬべきか意見を求めている。漱石はどちらにでも書けると答えて、女の気色をうかがう。漱石は「死ぬべき」とも「生きるべき」とも言わず、明確な答えを避けた。これからの女の行動に示唆を与えてしまうことになると漱石は直観し、簡単に答えられる問題ではないと考えたのであろう。その日、遅い時間になったため、漱石は女を送った。女は「先生に送って頂くのは光栄で御座います」と言うと、漱石は「本当に光栄と思いますか」と真面目に尋ねる。女は「思います」とはっきり答えた。そして漱石は、「そんなら死なずに生きていらっしゃい」と言うのである。

私はこの言葉を聞き、暖かさを感じた。と同時に美しいとも思った。

苦しい思い出を全て包み込んでくれるような暖かさが、この言葉からは滲み出ている。女はもし漱石に死を勧められたら、死ぬ覚悟だった筈だ。別れ際に漱石にかけてもらった「生きていらっしゃい」という言葉は、女にとって生きるための大きな救いになっただろう。その後も苦しい過去が思い出されてしまったとき、女はこの言葉を何度も何度も噛み締めたと思う。

では、美しさはどこから来たのだろうか。漱石は、「死は生よりも尊（たっ）とい」と考えている。目まぐるしく変化する無常の生の世界よりも、不変で穏やかな死の世界を評価しているのだ。だが、漱石は女に死ではなく生きることを勧めた。この言葉は明らかに彼の死生観とは矛盾している。が、女に死んだ方がいいと言うのを憚って、口先だけで「生きていらっしゃい」と言ったのではないと私は思う。あなたは生きてさえいれば、また光栄と思える日が必ず来る。だから、「生き

ていらっしゃい」。漱石が、純粋な好意から、女にとって必要だと考えかけたこの言葉に、私は美しさを感じたのであった。

漱石は、彼が生きた明治時代を「こころ」の中で「自由と独立と己れに満ちた現代」と述べている。今の時代はさらにその状態が加速し、エゴイズムがはびこっている。生きる私達は、孤独を感じ、自分という存在を見失って苦しんでいる。そんな私たちに、漱石はきっと、「そんなら死なずに生きていらっしゃい」と言ってくれるのではないだろうか。

審査講評

漱石と訪ねてきた女性のやり取りを通じて漱石の人間性の魅力を見出している。生きることに希望を感じる明るさがうかがえる。

二松学舎大学賞

イカロスと太陽

東京都立桜修館中等教育学校　2年
熊野（くまの）　風香（ふうか）

作品名『こころ』
選んだ一行
かつてはその人の膝の前に跪いたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せようとするのです。

この言葉は、「先生」自身が、畏敬の念を持っていた親友のKを、自分でも知らずのうちにでてきた静への独占欲により裏切ってしまったという過去を表している。それと同時に、「先生」のことを尊敬している「私」も「先生」の過去を知れば軽蔑して侮辱するだろうという意味も持っている。

「私」は、尊敬している「先生」にもっと偉くなってもらい、その背中に少しでも近づき、認めてもらうことで自分の存在意義を見つけようとしている。しかし、このように人の膝の前に跪いて築いた関係はとても脆く、自分が望むような評価がもらえなくなったとたんに、膨らみすぎた尊敬は侮辱

へと変わり、その人の頭の上に足を載せようとしてくるのだ。自分がその人の膝の前に跪いていたという事実は屈辱となり、怒りを伴う態度となって表面にでてくる。「だからこそ、未来の侮辱を受けないために今の尊敬を斥けたいのだ…。」と「先生」は続ける。これは、他者と関わりをもたずに孤独でいれば、他者に影響を与えずに、尊敬も侮辱も受けることはないということを伝えたかったのだろう。

私は、この部分を読んで、ギリシャ神話のイカロスの翼を連想した。翼をもったイカロスは、高く上がりすぎてはいけないという父親の忠告を忘れて、太陽までとんでいけると信じてどんどん高くとび上がっていった。しかし、太陽に近づきすぎたイカロスの翼は、その暑さに耐えられず、翼を焼かれたイカロスは天から真っ逆さまに墜落してしまった。この物語から私が考えたのは、憧れは憧れのまま胸にとどめておく方がよい、憧れに近づきすぎると、かえって良からぬ結果を招いてしまうということだ。「先生」は、「私」にとっての太陽であったが、自分の過去を隠すため、そしてそれを知った「私」が失望のあまり墜落してしまわないように、自らを「私」から遠ざけていたのではないかと思う。

「先生」は自らを淋しい人間だと表現する。彼は誰にも真実やこころの中を打ち開けられず、他者と距離を置いて、孤独の殻の中に閉じこもっている。しかし、「先生」のいうように他者と干渉しなければ、親友を自ら裏切り手放す淋しさや、尊敬から侮辱への転換の淋しさを味わわなくてすむ。こう考えると、人間はどう転んでも淋しいものだと思える。それは、人間はお互いに優劣をつけ合うものだからだ。友達といっても、その中に多少の優劣は存在する。自分の方が下だと思えば、寄り添い媚びを売って自分も優勢側になろうとする。反対に上だと思えば、安心して自分の方が優れているという優越感に浸る。この関係の中で生まれた尊敬と侮辱が、人間の中の淋しさを作り上げていくのだと思う。

審査講評

厭世的な先生が自らの内に秘めた思いを垣間見せた言葉に目を向け、他者との関係に付随する尊敬と侮辱を、淋しさをもたらすものとしてとらえたまま終わる点が面白い。

くまもと賞

人のこころとは

東京都立桜修館中等教育学校　2年
塩澤（しおざわ）　なずな

作品名『こころ』
選んだ一行
然し…。然し君、恋は罪悪ですよ。

恋を説明する際に「罪悪」という言葉よりも私を納得させる言葉もなかなか見つかり難いであろうと思う。例えばそれは時に人を追い込み、時に人を盲目にさせ、時に人を惑わせ、時に人に至福のひとときをもたらし、そして時に人に絶望を与える。さまざまな感情をいい意味でも悪い意味でも狂わせる「それ」は完全悪というわけでもない、それゆえに罪悪である。

この作品の中で先生は下宿先の御嬢さんに恋をするが、友人であるKもまた同じように御嬢さんに恋心を抱いていた。自分の知らないところで仲良くなっていくKと御嬢さんへの焦燥感、そしてKとの会話を通じて考えた先生なりの「覚悟」によって、先生はKのいないうちに御嬢さんを自分のものにすることとなった。しかし一方で恋愛にうつつを抜かしていた自分が許せなかったKは自殺してしまう。すなわち先生の罪悪は恋によって自分の弱さや狡猾さを露呈してしまったこと、そしてKの罪悪は恋のために「道の為には凡てを犠牲にすべき」と考えた自分の第一信条を破ってしまったことにある。

またこの作品における罪悪はこれだけにとどまらず、先生と御嬢さんとの関係に気づけず自分の恋心を先生に打ち明けてしまったKの罪悪、また御嬢さんと結婚して御嬢さんが自分のことを見るようになったころ、Kとの過去に囚われたまま御嬢さんのこころに向き合うことが出来なかった先生の罪悪など、さまざまな人の心情、「こころ」の数だけこの恋にまつわる罪悪がある。

私は、恋によって如実に現れる人間の弱い「こころ」、恋に目がくらんだ人間を通して見る利己主義的思考、すなわちエゴイズムがこの作品の主題であると解釈した。そしてそれを、この作品の核となる部分を一文で表現するとしたら、まさに「恋は罪悪」より相応しいものは存在しえないように思えるし、この短い一文がこの作品を読んだ人の心にどこか重たい余韻を残すのにも納得できる。

私とてこの年ともなれば恋の一つや二つは経験してきた

し、そのどれもが苦い記憶を伴うものであるが故、生意気ながら多少は恋の罪深さを理解しているつもりではある。だからこの一文を読んだ際、なんと痛いくらいに的確に現実を貫いた四文字なのだろうかと思った。しかし同時に、それでも人は恋を否定することは出来ないであろうということもまた現実だろうとも思った。

その罪悪の中にある快楽もまた、恋の罪悪と呼べるものなのかもしれない。

審査講評

一行の言葉の本質を自分なりの問題意識によってよく理解し、説明している。作品に描かれた様々な罪悪について指摘している点から作品を丁寧に読み解いていることがうかがえる。

佳作

自分の道を拓くために

光塩女子学院高等科　2年
川口（かわぐち）　真悠子（まゆこ）

作品名『私の個人主義』
選んだ一行
どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んでいかなくってはならないでしょう。

私は意志の強い人になりたい。自分の決めたことを最後まで貫き通せる人間になりたい。かといって独りよがりで、他者の意見を遠ざけるようにはなりたくない。意志の強さと独りよがりは紙一重であるから、私はいったいどんな姿を目指していけばいいのか迷ってしまう。漱石の『私の個人主義』は、なりたい姿を模索するうえでのヒントをくれた。それは、自分の考えのよりどころは外にではなく、あくまで自分の内に持つ、ということだ。

漱石の活躍した当時は、西洋を手本にしての文明開化の真っ最中だった。社会が西洋の進んだ技術を取り入れていく

中、文学に関しても西洋人の評価を何も考えず鵜呑みにする人が大勢いた。現代においても「西洋人」が「インフルエンサー」や「魅力的な広告」に取って変わっただけで、構図はほとんど変わらないのではあるまいか。影響力のあるものに盲従し、気付けばどこまでが自分の意志なのかわからなくなっていく。漱石はそのような姿勢に警鐘を鳴らした。「世界に共通な正直という徳義を重んずる点から見ても、私は私の意見を曲げてはならないのです。」と。

ではそもそも、自分の意見や道を貫く意志をどのように見つければ良いのだろう。漱石はこう書いている。

「どうしても、一つ自分の鶴嘴で掘り当てるところまで進んでいかなくってはならないでしょう。」

私はこの言葉にはっとさせられた。どうしても譲れないこだわりや信念、夢を自分の納得がいくまで突き詰めるには勇気が要る。その過程で傷つくこともあるだろう。だが一度突き詰めることができたとき、人は自らの内に「容易に打ち壊されない自信」を持つ。それは他者に否定されても壊れず、また、他者を否定することで自分の正当性を裏打ちした気になるような、他者との比較において成り立つものでもない。

漱石はロンドンで、英文学の研究において英国人と日本人の自分との意見の間に生じた矛盾について考えた。漱石の出した結論は、その矛盾は正誤の問題ではなく、各々が異なる考えを持つことに起因する、というものだった。これを踏まえて彼は「自己本位」の境地に至った。それは決して他者を省みない自己中心主義ではない。自分の個性の尊重を第一として、他者の個性も認め、尊重することである。そのためにはまず、自分への自信を見つけ出すことが肝心だ。私もまずは鶴嘴を持って、行くべき道を探し当てることから始めていきたい。

佳作

第三の道

光塩女子学院高等科　2年
小林（こばやし）　花帆（かほ）

作品名『夢十夜』
選んだ一行
自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っているほうがよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用することができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った。

「自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っているほうがよかったと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用することができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行った。」

心配症な私は、時々将来への猛烈な不安に胸が押し潰されそうになる。そんな時に『夢十夜』の第七夜を読み、不安に満ちた人生への示唆を与えてくれたこの一行が脳裏から離れなかった。

主人公は、いつ陸へ上がれるのか、どこへ行くのかも分からない航海に心細さを感じていた。航海について他者に尋ねても、的外れな返答が返ってきたり、関心さえ示してもらえなかったりと頼りにならない。学問や信仰にも心の拠り所を見出せず、心細さと不安に耐えかねた主人公は、ついに絶望して海に身を投げる。しかし、船から足が離れた瞬間、彼はその選択に無限の後悔をするのだ。

作中では、船や航海は何の喩えなのだろう。行き先や到着予定が分からないそれらは、最期や未来を予測できない人生にも似ている。未来が不透明であることは、心細く不安だ。また、他者が頼りにならない・頼れない状況に置かれたら、孤独のあまり生きる意味さえ見失ってしまうかもしれない。陰鬱な感情からの逃避願望ゆえ、不安すら存在しない死後に、希望を見出してしまう心情も理解できる。

漱石は、自著で死を「人間として達し得る最上至高の状態」と表現するように、死に対して憧憬を抱いていた。しかし、そんな漱石自身は自死を選択せず、『夢十夜』の作中でも主人公は自死行為、すなわち海に飛び込んだことに後悔している。漱石の死に対する考えと行動は矛盾しているように思われるが、彼は結局、安閑とした死は理想的な状態であっても、生に価値があるという結論に至ったのかもしれない。

読み進めていくうちに、私は自然と感情移入し、主人公の、

自死を選択し後悔する様子を身に迫るように感じた。この一行には教訓じみた言葉は一切ないが、漱石は上手い。私は、「今後何があっても死ぬのは止めよう」と強く思う。

しかし、その場に居続けるか死か、という究極の二択しか主人公には残されていなかったのだろうか。悲観的に考えるあまり、現状を耐え抜くか自死するかという選択肢しか見えなくなっていたのだろうか。

私は、止揚する道もあると思うのだ。主人公が乗っていた船を、西洋化を目指して盲進する日本国の比喩と考えるならば、船の速度を変えることもできるはずだ。襲い来る西洋化の波に馴染めず疎外感を抱くのだったら、西欧化の速度を落とし、西洋の良さを取り入れつつ自国文化を再認識する。そんな第三の道もあっただろう。私だったら、主人公を死なせはしない。主人公を救い、目的地へとたどり着かせたい。

佳作

自分を偽ること

光塩女子学院高等科　2年
佐久間（さくま）　ゆうか

作品名『硝子戸の中』
選んだ一行
私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかも知れない。

「私は生れてから今日までに、人の前で笑いたくもないのに笑って見せた経験が何度となくある。その偽りが今この写真師のために復讐を受けたのかもしれない。」

これは、漱石の笑った顔を撮るために必死になっている雑誌社の男が、頑なに笑わなかった漱石の写真に手を加え、笑顔に仕立て上げた自分の写真を見たときの漱石の反応である。

この文を読んだとき私は、夏目漱石は嘘や偽りを嫌う、なんと正直な人物なのだと思った。私なら、面倒臭くなって作

り笑いをしてしまう。そして、作り笑いをして自分自身を偽ったことに対しても、自省することはないだろう。

では、漱石はなぜ頑なに笑おうとしなかったのだろうか。もともと漱石は「当たり前の顔」つまり、平生の姿で写真を撮ることを約束していた。しかし、約束を破って笑顔に拘泥する雑誌社の男に、滑稽を感じている。それでもなお、笑顔を強要してくる男に、漱石の感情や態度は徐々に硬化していき、意固地になってしまっている。

漱石のこの態度には、終始一貫して「わざとらしく笑いたくない」という思いが表れている。わざとらしく笑うということは、自分の感情を偽って振る舞うということになる。わざとらしく笑わない漱石は、自分自身の感情にいつでも正直でいること、有りのままの自分を尊重することを第一義としているのだろう。

漱石は、今まで自分を偽ってきたことの復讐が、修整された自分の顔写真という帰結となったと考えている節がある。ここには、他者の虚偽や欺瞞のみならず、自分自身のそれをも嫌悪し、自身の偽りを自省するような誠実な性格がよく表れている。

日本語には「空気を読む」という言葉がある。その言葉の通り、その場の雰囲気を汲み取って行動する人は少なくない。私もその経験が何度となくあるが、それはすなわち自分の感情を無視し、自分自身を偽ることを意味している。何と息苦しいことか。私たちは自分の感情に素直になってみても良いのではないだろうか。漱石は、嘘や偽りに潔癖すぎるかもしれないが、それ故に笑わないと決めた意志を貫徹する芯の強さがあった。

「その偽り」によって復讐を受けないため、漱石の轍を踏まぬためにも、私は決めた。

空気を読まないで生きていこう、と。

佳作

先生と奥さん

東京都立桜修館中等教育学校　2年
林（はやし）　美帆（みほ）

作品名『こころ』
選んだ一行
私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私の有（も）っている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。

先生が「私」に宛てた遺書の中で彼はこう述べる。

物語を読み進めていくにつれ、先生は過去に大きな傷を受け、その傷が彼自身を大きく変えてしまったという事実が明らかになる。人間を信じることが出来ず、そこにある何か得体の知れない大きな影を纏うようにいた彼に、「私」は何か惹き付けられる様なものを感じたのだろう。

昔、信用していた親族に裏切られたことに大きなショックを受け、これが先生を大きく傷つけた。普通の善人であろうと人は悪人へと急に変わってしまうものだ、人を裏切る奴は許せないと人間を一般に憎むことを覚えた自分自身が次は恋という罪悪を犯しKを裏切ってしまった。彼の暗い過去が持つ大きな力は彼を「死」へと向かう道を歩かせたのだ。

遺書でそう述べる前に先生は彼と彼の奥さんについて「私たちは最も幸福に生れた人間の一対であるべきはずです」と言っていた。「私」と同じく、私は彼が何故幸福な人間であると言い切らずに、あるべき「はず」であると言ったのか引っかかった。しかし、その後の「私」が奥さんの持たせてくれたカステラを頬張るシーンには「そうしてそれを食う時に、必竟この菓子を私に呉れた二人の男女は、幸福な一対として世の中に存在しているのだと自覚しつつ味わった。」とある。「私」からみて二人は紛れもなく幸福な一対の男女であったことは間違いない。しかし、先生が犯した罪の意識が彼女を遠ざけてしまう。先生が妻と顔を合わせるだけでKという存在に脅かされる、皮肉なことに、妻という存在がKと先生を繋ぎとめる糸になっていた。

先生は奥さんに真実を話さないまま命を絶ってしまった。Kの死についての真相を知れば奥さんもまた罪の意識に苛まれてしまうかもしれないから先生はそうすることを決めたのだろう。しかし、ここで奥さんの「こころ」について考えてみるととても切ない気持ちになった。先生を愛していても愛されたくても夫の「こころ」はいつまでも何かに阻まれて見

えない。かといって何処が気に入らないのか訊ねても答えは得られないまま、最後には外出中に夫が命を絶つ。夫の死を目の前にした彼女の気持ちを考えるだけで胸が痛い。彼女は孤独な彼をどんな思いで支えてきたのだろうか。私は先生の本当の「こころ」からは置き去りにされていた奥さんのことを考えると彼女は幸福な一対の男女の片方であったとは言い難く感じた。

物語を読み終わった後は人間が持つ多様なこころの形を見たような気がして、何とも言えない切ない気持ちになった。まだ私自身の人生経験が浅いからか恋が人を醜く突き進めさせるさまに要領を得ていない。時間が経って様々な人の「こころ」に触れ、この作品を再読すれば先生のこころに深く入り込めるかもしれない。

佳作

私の理想と臆病と

東京都立桜修館中等教育学校　2年
宮坂（みやさか）　和来（わく）

作品名『こころ』
選んだ一行
私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。

私はこころという作品の中で先生が発した、『私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。』という一行を選んだ。なぜなら、私はこのような悲しい考え方をしたくないと思う一方で強く共感する内容でもあるからだ。まずここで触れておきたいのは、「寂しい」と「淋しい」の違いについてである。前者は、客観的にみて物静かな状態があり、その結果寂しさを感じるという意味合いがある。一方後者は主観的な感情や情緒に焦点を当てており、個人が誰かを思って涙が流れるような気持ちになったときに用いる。よって、彼は交友関係が狭いが故の静

かさについて言っているのではなく、涙が流れるような感情、想像するに、誰かを恋しく思う感情や求める感情がありながらも、それでもその淋しい状況を我慢すると言っているのだ。私はこの意味の違いに、まず物悲しい気持ちになった。

この言葉を私が悲しいと言った理由は、彼が自分の考えによって未来を決めつけ諦めてしまっているからだ。彼の思想は彼自身の実体験によって結び付けられている。しかし、それでもその思想が絶対に間違っていないという保証はない。まだ未確定のことを過去の事例に囚われ臆病になっているだけで、あったかもしれない未来を見て見ぬふりをするのは悲しい以外の何者でもないのではないか。だから私は、あの言葉のように自ら望んで諦めていく姿勢にはなりたくない。

しかし私にも、彼と同じように決めつけて諦めていることがいくつもある。他者から聞いた失敗談や自分のやり直したい過去など、世の中には多くの「進んではいけない道」が用意されている。それらは、自分と同じような後悔をしてほしくないという善意から来ているものが多くあるというのは事実だ。しかし結果的に人を臆病にさせ、可能性の芽が摘まれる要因になっていることも間違いのない事実だ。私は、何かを得るのは大変だが失うのは一瞬であると知っている。だから臆病にならざるを得ないのだ。失って振出しに戻る、ましてやマイナスまで戻ってしまうくらいなら、今のままでいたいと思ってしまう。彼の言葉に強く共感するのだ。

この在りたい自分の理想像と、それに近づくには大きすぎるリスクに怯える自分とのギャップについて、この一行は考える機会を与えてくれた。この作文を通して自分と語らうことで、解決への糸口を見つけられたらと思ったが、結果的にそれは叶わなかった。勇気を出して進んでみる方が、どのような結果になっても悔いは残らないだろう。ただ、今はそう考えられていても後で同じように考えられるか自信が持てない。どうしたら前へ動けるだろうか。先生に問いたい。

佳作

利己心と道徳心

広島県立海田高等学校　2年
石原（いしはら）　光莉（ひかり）

作品名『こゝろ』
選んだ一行
世間はどうあろうともこのおれはりっぱな人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのためにみごとに破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。

私が「こゝろ」を読み、心に深く残った一行は、「世間はどうあろうともこのおれはりっぱな人間だという信念がどこかにあったのです。それがKのためにみごとに破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。」という部分だ。なぜこの部分であるかというと、自分自身もこの「先生」のような行動を取ってしまうかもしれない、ということに一種の恐怖を感じたからだ。

私はこの作品の「先生と遺書」の一節を昔読んだことがある。その時は単純に先生は何てひどい奴なんだ、と思った。今思えばこれには自分だったらそんな事はしないというニュアンスが含まれていた。しかし、今改めてこの作品を通して読み、少し印象が変わった。

先生は「僕」に人間は平生は普通だが、いざという間際に悪人となる、と語っている。先生自身、昔叔父に騙されていてその事を知っていた。だがしかし、先生も間接的に人を殺してしまい、自分も叔父と同じだと気づいたのだ。

だがしかし、もし私が先生と同じような立場に立ったら、私はどうするのだろうか。例えば、自分の人生を決める大事な試験があったとする。それに一問の差で合格した。しかしその一問が間違って丸をされたものだったとしたら、どうだろうか。「善人」であればきっと名乗り出るだろう。だが、私はそうできるのだろうか？いや、もしかしたら私は名乗り出ないかもしれないと思った。昔、先生のことを悪い奴だと思い、自分だったら絶対そんな事しないと考えていた。しかし、この考えに至った時、私も先生になり得るのだ、と思った。そしてそれは私だけではなく、この世にいる人全員に言えることなのだろうと。実際、先生も叔父に騙され、その痛みを知っていながら、己のために行動し、人を傷つけた。痛みを知っていたとしても、その行為をしてしまう可能性が全

員にあるのだろう。

もちろん、自分がそういった選択をするかは、自分の心の状態や、その時の周りの状況によって変わってくるだろう。そして、自分がその当事者、被害者、そして傍観者となりうる世界へこれから進んでいかなければならない。だが、今私が「人を傷つけないように生きよう」と決心したとしても、きっとそれは意味を成さないだろう。人間の心は時と共に、そして歩んだ出来事で変わってゆく。私がどんな選択をするかは、その時になってみないと分からないのだ。

今は想像する事しかできないが、私にそんな選択をする時が訪れた時、私の心はどちらの心に従い、行動しているのだろうか。道徳心なのか、それとも利己心なのだろうか。

読書感想文　選んだ一行

惜しくも入賞を逸しましたが、最終審査候補となった作品と、その「わたしの一行」を掲載します。

《中学生の部》

新宿区立新宿西戸山中学校　3年

題　名　夢十夜の不思議

作品名　『夢十夜』

選んだ一行　「御父さん、重いかい」と聞いた。「重かあない」と答えると「今に重くなるよ」と云った。

長野清泉女学院中学校　3年

題　名　私が感じた硝子戸の中

作品名　『硝子戸の中』

選んだ一行　家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸を明け放って、静かな春の光に包まれながら、恍惚とこの稿を書き終るのである。

日本女子大学附属中学校　1年

題　名　無償の愛

作品名　『坊っちゃん』

選んだ一行　かえさないのは清を踏みつけるのじゃない、清をおれの片われと思うからだ。

日本女子大学附属中学校　1年

題　名　言葉の重み

作品名　『こころ』

選んだ一行　「覚悟、―覚悟ならないこともない」

日本女子大学附属中学校　1年

題　名　つながりを持つ大切さ

作品名　『坊っちゃん』

選んだ一行　清はおれのことを欲がなくって、まっすぐな気性だと言って、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方がりっぱな人間だ。

《高校生の部》

光塩女子学院高等科　2年

題　名　先生のこころ

作品名　『こころ』

選んだ一行　私は何千万といる日本人のうちで、ただあなただけに私の過去を物語りたいのです。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　人間の罪とは何か

作品名　『こころ』

選んだ一行　私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　誰にも問えぬ罪

作品名　『こころ』

選んだ一行　然し私の尤も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだったのに何故今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　自分を理解すること

作品名　『こころ』

選んだ一行　他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　先生の語る愛とは

作品名　『こころ』

選んだ一行　女には大きな人道からくる愛情よりも、多少義理を外れても自分だけに集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いように思われますから。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　自分を愛するということ

作品名　『こころ』

選んだ一行　私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっているのです。

東京都立桜修館中等教育学校　2年

題　名　わかってほしい

作品名　『こころ』

選んだ一行　世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。

掲載は順不同です。

絵画コンクール

どんな夢を見た？
あなたの「夢十夜」

小学生低学年（1・2・3年生）の部

最優秀賞 …… 64
朝日新聞社賞 …… 65
紀伊國屋書店賞 …… 66
新潮社賞 …… 67
東京理科大学賞 …… 68
二松学舎大学賞 …… 69
くまもと賞 …… 70
佳作 …… 71

小学生高学年（4・5・6年生）の部

最優秀賞 …… 78
朝日新聞社賞 …… 79
紀伊國屋書店賞 …… 80
新潮社賞 …… 81
東京理科大学賞 …… 82
二松学舎大学賞 …… 83
くまもと賞 …… 84
佳作 …… 85

最優秀賞

タイトル

アザラシとあそぶゆめ

新宿区立戸塚第二小学校　3年　坂本（さかもと）　妃花里（ひかり）

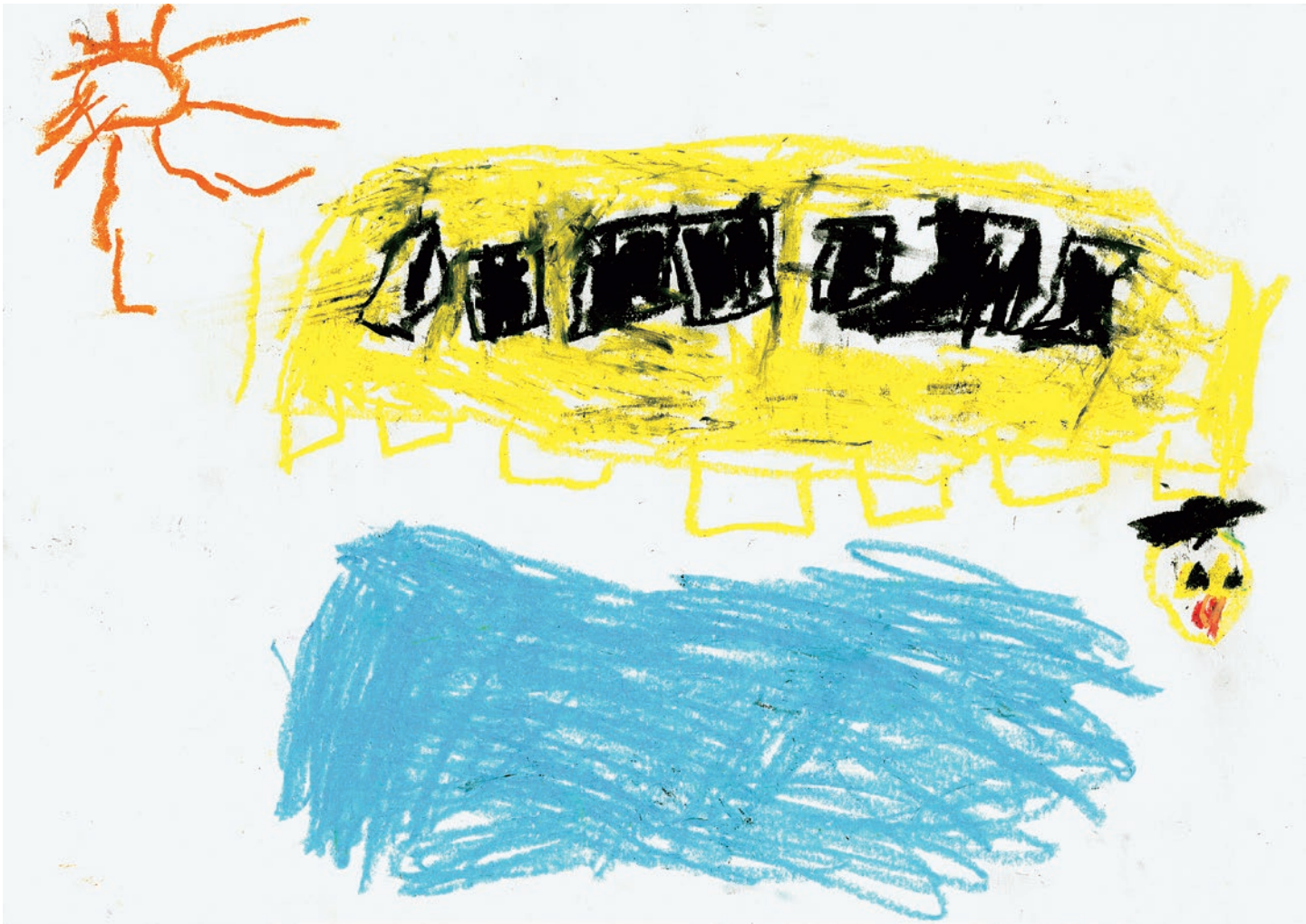
説　明

私はアザラシのぬいぐるみをもっています。名前はシャイン。夢の中で本物のアザラシになって一緒にあそびたいです。自分もアザラシになった気分です。

審査講評

アザラシのモチーフを大胆に表現してインパクトがある。アザラシで頭がいっぱいになるほど好きな様子が伝わってくる。

朝日新聞社賞



タイトル

ドクターイエロー

熊本県立かもと稲田支援学校　1年　野中（のなか）　結翔（ゆうと）

説　明

かっこいい黄色の新幹線が水の上をビュンビュン走っていました。

審査講評

水の上をドクターイエローが走るという発想が面白い。

紀伊國屋書店賞

タイトル

おばけレース

新宿区立四谷小学校　1年　石津（いしず）　颯才（そうさい）

説　明

ぼくがくるまにのってドライブしていたらおばけたちがやってきてレースになりました。とてもこわかったけどいっしょにはしっているとみんなとなかよくなっていました。たのしいゆめでした。

審査講評

絵に力強さがあり、お化けとのレースを楽しんでいる様子が伝わる。

新潮社賞

タイトル

きょうりゅうになったよ

玉名市立横島小学校　3年　野村（のむら）　蓮介（れんすけ）

説　明

きょうりゅうになってみたいから書きました。

審査講評

恐竜と遊びたい、乗ってみたいなどを通り越して、自ら恐竜になってみたいという願望に恐竜がとても好きなことがうかがえる。

東京理科大学賞

タイトル

人のからだの夢

新宿区立余丁町小学校　1年　佐倉（さくら）　こえり

説　明

夢で自分のからだの中を見てみたい。

審査講評

体の中を見るという発想が素晴らしい。色づかいもきれい。

二松学舎大学賞

タイトル

わたしのゆめ

新宿区立落合第一小学校　1年　利重（としげ）　育（いく）

説　明

ゆめのなかにでてきてほしいものを、ならべました。

審査講評

オレンジの鮮やかな色に好きなものを並べている。夢に出てきてほしいものがたくさんあることに元気を感じる。

くまもと賞

タイトル

どんなゆめみた？

新宿区立淀橋第四小学校　2年　石内（いしうち）　璃王（りお）

説　明

たい風にとばされた

審査講評

台風に飛ばされる怖い夢を絵にしてみようという発想が独創的。

佳作

タイトル　八戸の海で雲の上にのってるユニコーン

江戸川区立船堀小学校　3年　月舘（つきだて）　志乃（しの）

説　明

八戸の海で出会ったユニコーンがツノの力で海をきれいにしてくれた。私はユニコーンの写真をとらせてもらった。

タイトル　虹色さん歩

北九州市立則松小学校　3年　仲川（なかがわ）　真人（まなと）

説　明

ぼくの家でかっている「ウーパールーパー」と「金魚」にのって水の中をさん歩したいです。みんなきもちよさそうにおよぐから１回あじわってみたいな。

佳作

タイトル　ベリー大すきだよ

新宿区立落合第一小学校　3年　佐々木（ささき）　奏（かな）

説　明

チワワのベリーとおわかれしてから、はじめてのおぼん。むかえ火のかわりに、にわで花火をしました。その夜は、ベリーといっしょにねているゆめを見ました。

タイトル　まぼろしのちょうちょうさがし

新宿区立柏木小学校　3年　深澤（ふかざわ）　穂（みのり）

説　明

私は虫の中でちょうちょうが一番好きです。なので、自分が、まぼろしのちょうちょうをさがしているところを書きました。

佳作

タイトル　お祭りをプレゼント

新宿区立津久戸小学校　1年　腰越（こしごえ）　雪乃（ゆきの）

説　明

町の猫たちが集まって、お祭りで買ったリンゴ飴や綿菓子や金魚を、金平糖（こんぺいとう）の橋をわたり、月のうさぎに届けに行きました。大きな流れ星が流れてきたので、みんなで願い事をしました。

タイトル　いるかにのって海のぼうけん

新宿区立余丁町小学校　2年　大塚（おおつか）　遥乃（はるの）

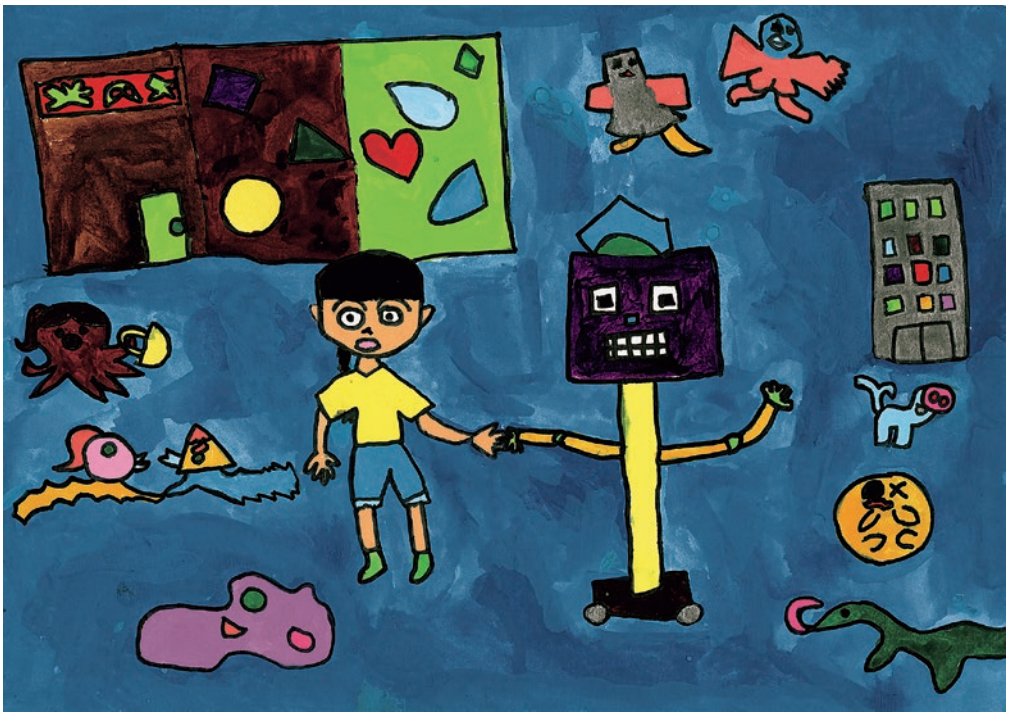
説　明

わたしと妹がいるかにのって、海のぼうけん。いるかをさそって海のおたからを手にいれました。半分おたからをともだちのいるかにとどけにいきました。

佳作

タイトル　1000年後の新宿

新宿区立早稲田小学校　3年　森（もり）　ふよう



説　明

私がねている間にタイムスリップして、1000年後の新宿に来てしまった。そうしたら、ロボットとヘンテコな生き物がいた。

タイトル　りゅうにのってとんだゆめ

日本女子大学附属豊明小学校　1年　市原（いちはら）　由衣（ゆい）

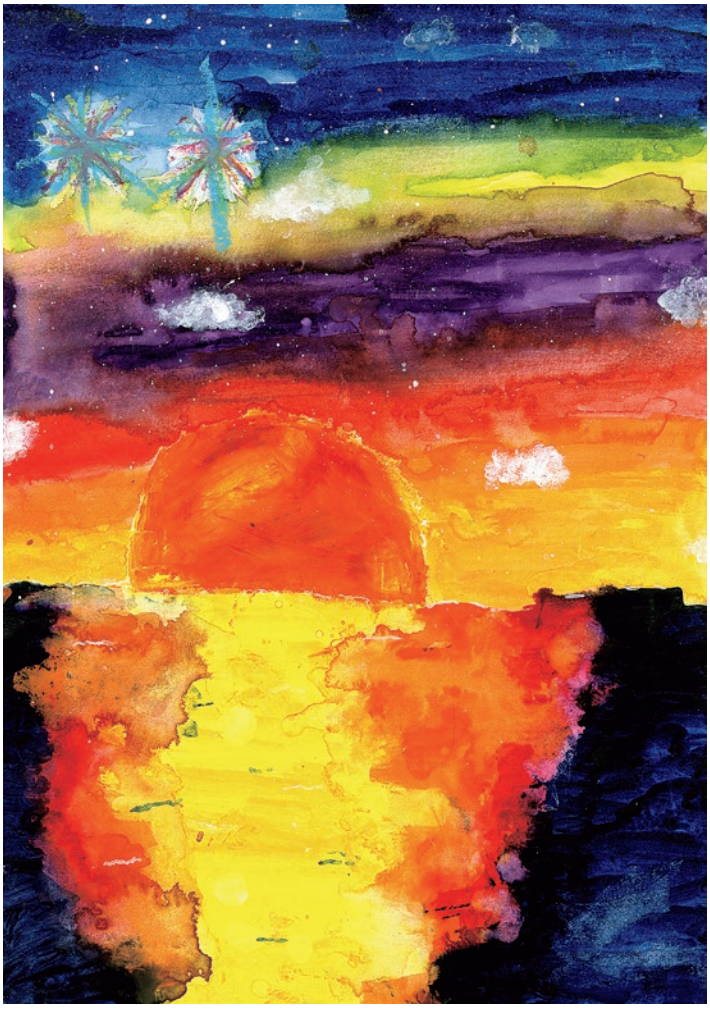
説　明

エルマーの絵本が大好きな娘はいつか私も竜に乗って飛んでみたい！と願っています。夢で叶えられる日を楽しみにしています。

佳作

タイトル　わたしと夕日

文京区立誠之小学校　2年　東（ひがし）　櫻子（さくらこ）



説　明

わたしとお友だちで夕方の海にあそびに行って、海に入ろうとしたら、二人とも光になって夕方の海をとびまわったゆめ。

タイトル　月の光

目黒星美学園小学校　2年　中井（なかい）　優里（ゆうり）

説　明

迷子になって、月の光で家に帰る夢。

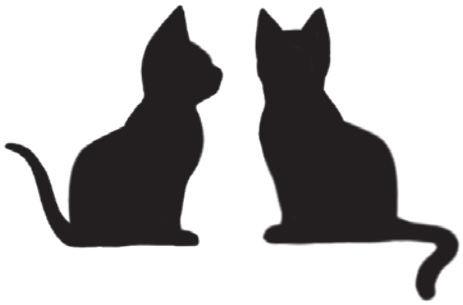
佳作

タイトル　夢の夢

目黒星美学園小学校　2年　安永（やすなが）　都和乃（とわの）

説　明

本当に寝たら、寝る夢をみて、その夢の中でも寝る夢をみて、そのまた夢の中でも寝る夢を見ることが、永遠に続いてほしいなと思いました。



最優秀賞

タイトル

夢の中の絶景

玉名市立八嘉小学校　5年　西（にし）　愛梨（あいり）

説　明

自分がひもにぶらさがっていて、その前には雲海が広がっている場面を表した絵です。

審査講評

雲にぶら下がるのでなく、紐にぶら下がって雲の上から雲海の絶景を眺めている情景が素敵。

朝日新聞社賞

タイトル

久しぶり

新宿区立四谷第六小学校　5年　伊地知（いぢち）　小実（このみ）

説　明

天国へいった犬が夢に出てきて心の中で真っ先に思った気持ちです。

審査講評

犬をかわいらしく描いている。手乗りサイズになって、切手が貼られた球体に入っているところが不思議な夢の雰囲気を出している。

紀伊國屋書店賞

タイトル

ドアにつながる宇宙の世界

新宿区立落合第三小学校　5年　三堀（みつほり）　真歩（まほ）

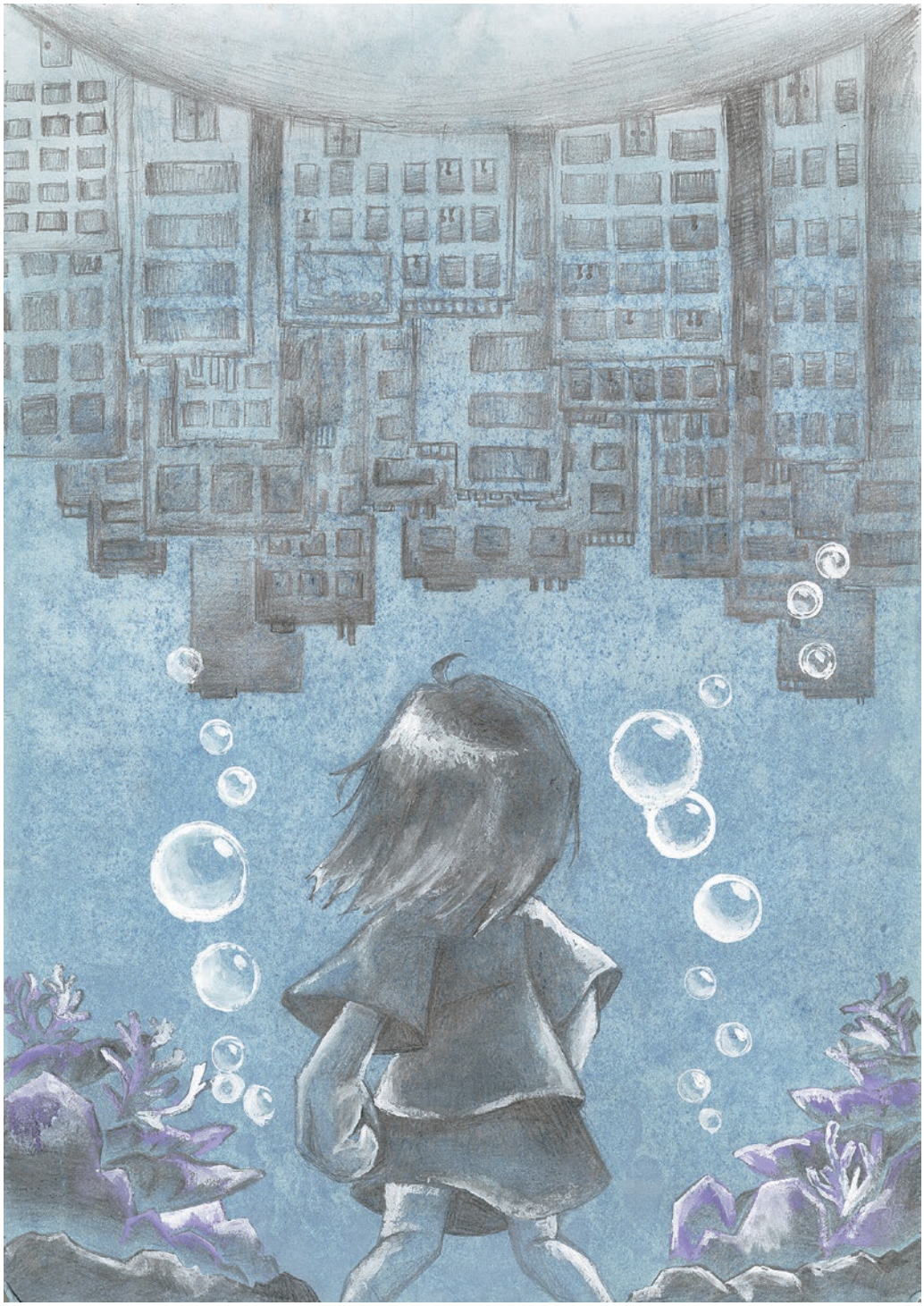
説　明

あこがれていた家を出ようとしたらドアと宇宙がつながっていた。

審査講評

家のドアが遠い宇宙につながる印象的な光景を描いている。

新潮社賞



タイトル

浸水都市

新宿区立落合第六小学校　6年　木村（きむら）　真白（ましろ）

説　明

私はよく実際に起こりそうな夢を見ます。その中で特に印象に残っている夢を描きました。

審査講評

逆さまな都市が水に浸かっている様子を眺めている作者。ストーリー性に惹かれるほか、構図がよく完成度の高い作品。

東京理科大学賞

タイトル

アリ

安芸太田町立筒賀小学校　6年　馬場（ばば）　俊輔（しゅんすけ）

説　明

地球に巨大なアリあらわる！

審査講評

小さなイメージのアリを巨大化させる発想が自由でよい。

二松学舎大学賞

タイトル

妖怪戦争

宮崎市立赤江小学校　4年　眞田（さなだ）　琉衣（るい）

説　　明

大好きな妖怪が次つぎと出てくるすてきなゆめ

審査講評

妖怪を愉快に楽しく描き、妖怪が大好きなことが表現されている。

くまもと賞

タイトル

夕暮れの海

新宿区立戸塚第二小学校　6年　大野（おおの）　葵衣（あおい）

説　明

海は場所によってちがう色にも見えるのでちゃんとそうなるように意識しました。海もできるだけ絵の具の白をつかわずに紙の白を使いました。こんな夢をみました。

審査講評

色づかいがきれい。色の付け方をよく考えて描いたのが伝わってくる。

佳作

タイトル　古代へタイムスリップ

安芸太田町立筒賀小学校　5年　井野上（いのうえ）　蒼樹（そうき）

説　明

僕が昔の世界に行って見てみたいものをかきました。

タイトル　ミニトマトパラダイス

熊本市立古町小学校　5年　村元（むらもと）　明莉（あかり）

説　明

わたしは、トマトの中でもミニトマトが好きでミニトマトをたくさん食べたいなと思って書きました。これが、かなうならかなってほしいです。まさにわたしのゆめです。

佳作

タイトル　恐怖の夢…

新宿区立大久保小学校　5年　ユキ　ココ

説　明

６歳の頃見た恐怖の夢。一人で部屋にいた時、恐怖の笑い声が耳にひびきました。うしろを見ると化け物や幽霊がいました。前を向いた瞬間、肩をつかまれた!?夢を描きました。

タイトル　ネコノヒト

新宿区立柏木小学校　6年　萩口（はぎぐち）　泉太（せんた）

説　明

よく分からずに先が見えない橋をずっと歩き続けていると、人のような猫に会った。話しかけたら、すごい目で「ネコノヒトデス」といわれた。

佳作

タイトル　笑顔の夏

新宿区立柏木小学校　6年　橋本（はしもと）　璃果（りか）

説　明

昨年の夏　今年の夏は、夏祭りも花火大会もなかなか行けなくて、友達との夏の思い出が少ない年が続いているので、今を忘れておもいっきり楽しく、笑顔で過ごしている人たちを描きました。こんな楽しい日常、夢が現実になってほしいという願いをこめて描きました。

タイトル　プロ野球選手とドームで野球

新宿区立戸塚第三小学校　5年　岩﨑（いわさき）　統杏（とうあ）

説　明

プロ野球の選手と野球をした

佳作

タイトル　SOS

新宿区立富久小学校　6年　穴沢（あなざわ）　千寛（ちひろ）

説　明

不思議な動物がいる森に迷いこんだ夢を描きました。

タイトル　新宿の空でシュノーケル！

新宿区立戸山小学校　5年　猪俣（いのまた）　乃々華（ののか）

説　明

家族旅行に行った石垣島でシュノーケルをしました。新宿が海になったらおもしろいと思いました。なので、こんな夢が見られたらいいなと思いました。

佳作

タイトル　海

新宿区立西新宿小学校　6年　宮地（みやじ）　咲希（さき）

説　明

海の中について書きました。自分が人魚になったつもりで書きました。

タイトル　白くま in the sea

新宿区立西戸山小学校　6年　増渕（ますぶち）　歩実（あゆみ）

説　明

白くま兄弟が海に遊びにいくと、大きな白くまかき氷にで会いました。

佳作

タイトル　ゆうやけの海とクジラ

新宿区立東戸山小学校　4年　合田（ごうだ）　真一朗（しんいちろう）

説　明

しずかな人がいないゆうやけの海、クジラがよろこんでいます。こんなゆめみたいな！

タイトル　あかるいひかりにかこまれたどくきのこ

新宿区立東戸山小学校　4年　所（ところ）　雷太（らいだあ）

説　明

ゆめにでてきたどくきのこです。

佳作

タイトル　夢みる娘

文京区立誠之小学校　5年　王（おう）　海萌（みもえ）

説　明

ある日、くじらの上でうとうと居眠りをしていると、好きな洋服やお城を買ったり、おいしいものを食べたりする、そんなうれしい夢。

秋田雨雀
土方与志 記念青年劇場

行きたい場所をどうぞ

瀬戸山美咲＝作　大谷賢治郎＝演出

2023年秋から
全国公演へ――!

自分の将来を小さく見積もっている女子高生と、駅で道案内をするAIロボットのふたり(?)が、「行きたい場所」を見つける旅に出る。
たくさんの人と出会い、助けを借りながら、ふたりがたどり着く場所は……。

コロナ禍の今だからこそ、中高生たちに、泣いて、笑って、心が震える、演劇の魅力がたくさん詰まった作品をお届けします。学校での演劇鑑賞教室、地域の青少年に向けた上演会など、あなたの街でも企画しませんか?

お問合せ
青年劇場
青少年劇場部
TEL 03-3352-6990
FAX 03-3352-9418
info@seinengekijo.co.jp
https://www.seinengekijo.co.jp/

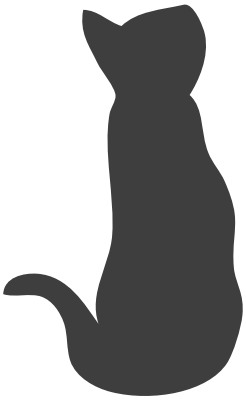
グラフィックデザイン
&
WEBデザイン

ids
for creative communication

チラシからパンフレット、年史、
WEBサイトまで幅広く手がけております。
お気軽にご相談ください。

お問合せはこちら　info@ids-p.co.jp

株式会社アイデス・プランニング
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-2 APビル6F
TEL▶03-3404-4171　HP▶ids@ids-p.co.jp



大切なあのひとへ、
本との出会いを。

図書カードNEXT

本に親しむきっかけを作る贈りものです。

自ら本を選ぶ楽しい経験は、好奇心を育て、
やがて読書に取り組む楽しみや習慣へと変わります。
お子さまに図書カードNEXTを贈ってみませんか。

www.toshocard.com　日本図書普及株式会社

身近なものから SDGs

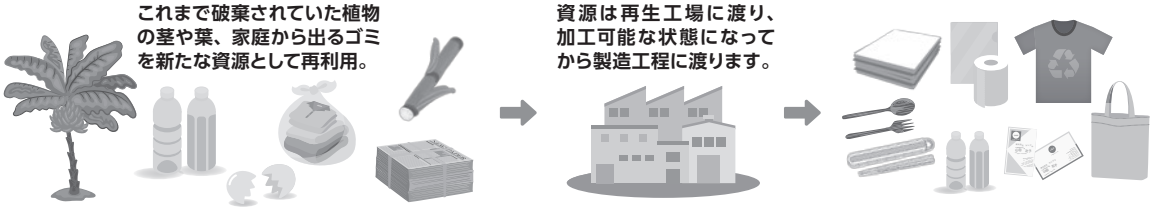
あかつき印刷は推進していきます

～できることからはじめてみませんか？～

捨てない、ムダにしない工夫 → **もう一度つかうために** → **生まれ変わる**

これまで破棄されていた植物の茎や葉、家庭から出るゴミを新たな資源として再利用。

資源は再生工場に渡り、加工可能な状態になってから製造工程に渡ります。



卵の殻が原材料
エコ玉名刺

＼環境負荷の低減に貢献します／

年間で約26万トンも産業廃棄物として処理されている**卵の殻**を原材料としています！

再生材料50%使用！
クリアファイル

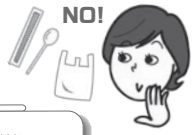
海洋へのプラスチック流出問題の解決に向けて

Plastics Smart

これが目印！
海洋プラスチック問題の解決に貢献する取組を実地しているマークです。

お箸を断って簡単なエコ活動を
オリジナルお箸&ケース

持っているだけで資源削減、環境保護につながります。

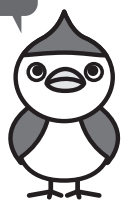


繰り返し使えるものへ
エコバッグ

レジ袋の購入頻度を減らしてエコバッグを持てば節約にもつながります。

各種印刷物やイベントグッズの作成・提案、ホームページの作成、動画配信のサポート・編集まで、お客様のご要望をカタチにいたします。

お気軽にお電話ください



AP AKATUKI あかつき印刷株式会社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-25-2 APビル
FAX 03-3497-0043 https://www.aik.co.jp/
TEL 03-3497-0531

〈主催〉新宿区・新宿区教育委員会

〈後援〉東京都教育委員会、千代田区、文京区、熊本県、熊本市、阿蘇市、玉名市、松山市、伊豆市教育委員会、広島県安芸太田町、鎌倉市、早稲田大学、東北大学、二松学舎大学、東京理科大学、㈱朝日新聞社、朝日小学生新聞・朝日中高生新聞、㈱岩波書店、㈱新潮社、㈱紀伊國屋書店、新宿区町会連合会、鎌倉漱石の會、一般社団法人新宿区印刷・製本関連団体協議会、公益財団法人新宿末来創造財団

〈対象〉読書感想文コンクール　全国の中学生・高校生
絵画コンクール　全国の小学生

〈賞〉　最優秀賞、朝日新聞社賞、紀伊國屋書店賞、新潮社賞、
東京理科大学賞、二松学舎大学賞、くまもと賞、佳作

・本書に掲載した内容の無断転用を禁じます。

・選んだ一行は、原則、応募者本人が応募票に記載したとおり表示しています。したがって原文とは表記が異なる場合があります。

・文中には、今日の観点からみると不当・不適切と考えられる表現がありますが、原文の歴史性・文学性を考慮して、そのままとしました。

・作品集作成にあたり、作品によっては句読点など付け加えました。

・絵画は実際の作品と色合いが多少異なる場合があります。

・説明文は、原則、応募者本人が応募票に記載したとおり表記しています。

この印刷物は業者委託により700部印刷製本しています。その経費として１部あたり1,564円（税込）がかかっています。ただし、編集時の人件費や、配送費などは含んでいません。

令和４年度新宿区夏目漱石コンクール作品集
発 行 年 月：令和５年３月
編集・発行：新宿区文化観光産業部文化観光課
〒160−8484　東京都新宿区歌舞伎町１−５−１
TEL.03(5273)4126　FAX.03(3209)1500

印刷物作成番号
2022−46−2801